神奈川大学21世紀COEプログラム
人類文化研究のための非文字資料の体系化
Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies

ISSN 1348-8139

News Letter 2007.3 No.15

非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials

Information

COE

2007年3月末までに発行の刊行物（特に明記されたものを除き、編集・発行主体は神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議とする）

年報第4号
『人類文化研究のための非文字資料の体系化』 A4判 321頁

●内容：<論文>非文字資料としての建築図面（西和夫）、中世都市鎌倉の環境（河野眞知郎）、生活再現展示の思考（青木俊也）、近世の日記に見る旅と災害・海外における災害研究の新しい傾向について（北原糸子）
<研究ノート>「絵引」をする菅江真澄（菊池勇夫）、「澁澤写真」の類型化について（八久保厚志）、ユニバーシティ・ミュージアムと学芸員養成課程（樫村賢二）、戦時下の中国民俗研究（王京）、中国における言語評価（宮本大輔）
<調査報告>旧満洲国の「満鉄附属地神社」跡地調査からみた神社の様相（津田良樹・中島三千男・堀内寛晃・尚峰）、日系カナダ人の持つ地名の記憶（本田佳奈）

研究成果報告書
『マルチ言語版「日本常民生活絵引」』第2巻
●編集：第1班「図像資料の体系化と情報発信」

シンポジウム報告
『図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』

調査研究資料4号
『手段としての写真―「澁澤写真」の追跡調査を中心に―』
●編集：第3班「環境と景観の資料化と体系化」

シンポジウム報告
『歴史災害と都市―京都・東京を中心に―』（2007年2月刊行）
●編集・発行：立命館大学21世紀COEプログラム「文化遺産を核とした歴史都市の防災研究拠点」
神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議

ホームページに新しいデータベースがアップしました
「名所江戸百景」と江戸地震データベース

安政3年（1856）2月から出版されはじめた歌川広重「名所江戸百景」には安政2年（1855）10月2日の地震の影響が色濃く反映されています。従来の名所絵解釈とは異なり、地震と関係のある33点の名所絵を選び、その地点の地震被害および名所絵に描かれた震災の痕跡を解説します。

http://www.himoji.jp/database/db03/

日本常民文化研究所
Institute for the Study of Japanese Folk Culture

神奈川大学日本常民文化研究書論集（2007年2月刊行）
『歴史と民俗』23
●編集：神奈川大学日本常民文化研究所／発行：（株）平凡社

本山雑記（2007年3月刊行）
奥三河において山林経営の傍ら町長を務めた原田清は、澁澤敬三や柳田國男、早川孝太郎らとも交流があり、設楽地域の民俗研究にも造詣の深い地方知識人であった。彼が残した『本山雑記』の翻刻にあわせ、巻末に原田畊作「父を語る」、伊藤敏女「早川孝太郎と原田清―綾なす軌跡と回帰―」、斎藤美奈子「『本山雑記』とその時代」、橘川俊忠「解題」を掲載。
●編集：神奈川大学日本常民文化研究所／発行：（株）日本評論社

水産総合研究センター所蔵古文書目録―山口県関係史料―
●編集：神奈川大学日本常民文化研究所／発行：独立行政法人水産総合研究センター中央水産研究所

歴史民俗資料学研究科
Graduate School of History and Folklore Studies

2007年3月末までに発行の刊行物

『歴史民俗資料学研究』第12号
●発行：神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科

神奈川大学歴民調査報告第4集
『渋江公昭家文書目録』（2）
●編集：田上繁／発行：神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科

歴史民俗資料学叢書2
『財界人の戦争認識―村田省蔵の大東亜戦争―』（半澤健市著）
●編集：神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科
●発行：神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議

外国語学研究科 中国言語文化専攻
The Course of Chinese Language and Culture, Graduate School of Foreign Languages

『神奈川大学大学院 言語と文化論集』第13号
2007年2月刊行 A5判 194頁
●編集・発行：神奈川大学大学院外国語学研究科

各研究所・研究科 問合せ

刊行物や催し物については該当する各所にお問合せください。 045-481-5661（代）

●日本常民文化研究所（内線4358） ●歴史民俗資料学研究科（内線4024）
●中国語共同研究室（内線4525） ●COE支援事務室（内線3532）

非文字資料研究 No.15

発 行 日 第15号 2007年3月31日 発行
編集・発行 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
The Kanagawa University 21st Century COE Program Center
Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies
〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1
■Tel.045-481-5661 ■Fax.045-491-0659 ■URL http://www.himoji.jp/

非文字資料研究
The Study of Nonwritten Cultural Materials
News Letter 2007.3 No.15

CONTENTS

Interview
中世鎌倉の景観を語る―私の発掘覚書― ・・・・・・・・・ 3
Medieval Landscape of Kamakura
河野　眞知郎　KAWANO Shinjiro

研究エッセイ　ESSAY
『絵巻物による日本常民生活絵引』マルチ言語版編纂における問題 ・・・・・・・・・・・ 16
Problems in the Compilation of the Multilingual Version of "Pictopedia of Everyday Life in Medieval Japan"
君　康道　KIMI Yasumichi

写真から人口現象を読み解く ・・・・・・・・・・・・・・・ 18
Every Picture Has Various Kinds of Information
平井　誠　HIRAI Makoto

フィールドノート　Field Note
性とジェンダーをどうとらえるか ・・・・・・・・・・・・・ 19
―人類文化における普遍性と特殊性の一事例研究―
國弘　暁子　KUNIHIRO Akiko

■コラム　Column ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
瀬戸内の小さな島で
香月　洋一郎　KATSUKI Yoichiro

フィールドノート　Field Note
変化しつつある文化遺産 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
―広東醒獅の現状について―
彭　偉文　PENG Weiwen

■コラム　Column ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
野外民族博物館リトルワールドにおける「民族」概念についての初歩的レポート
フレデリック・ルシーニュ　Frédéric LESIGNE

■コラム　Column ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
北斎を追って
ディオゴ・カウパテス　Diogo KAUPATEZ

■コラム　Column ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
神奈川大学付近での考察に見られた日本の村落共同体
劉　暁春　LIU Xiaochun

■受贈資料一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28

■主な研究活動 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29

■原信田實さんの笑顔にもう会えない ・・・・・・・・・・・・ 30

■彙報 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

■ Information ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32

表紙写真説明

「世俗」のイメージ

西荻窪の骨董店で「明治時代のメンコ」、「昭和二十年代のデッドストック」などの説明をつけられ、ひと山いくらの廉価で売られていたかつての「家族合わせゲーム」の札。裏面は何の印刷もない生のままの紙面で粗末なつくりなのだが、絵のイメージも名前のつけかたも、うんざりするほどいかにもそれらしいものばかりである。こうしたイメージはいつごろどのようにして形成されてきたのだろうか。社会がこうした類型化された存在であふれかえっているわけでは、もちろんない。しかしこうした類型は決して無根拠につくられたものでもない。かつて子供向けのTVドラマにソフト帽でサングラスのおじさんが登場したら、それはもうそれだけで悪い奴だと思わされていた。その横に鳥打帽で顔に傷をもつ男がついていたら、どうしてすぐにこいつは手下だ、と納得してしまっていたのだろうか。そんな認識の方向性や価値判断はいつインプットされたのだろうか。こうした認識への問いは結構深いところにいきつくのかもしれない。

「家族合わせゲーム」は、夫婦と男女一人ずつの子供（場合によってはこれに使用人などが加わる）の組合せを揃え終わると「上がり」となる。こうしたゲームの成立自体、ある社会性を強く含んでいよう。やや大げさに言えば、子供たちはこれで遊びつつ、類型概念としての家族や職業というものを把握し確認していく素朴な体験を持ったのかも知れない。

なお、ここで示した札の一部は「三光玩具」という会社がつくっていた。この表紙に載せるに際して、東京と大阪と名古屋で「三光」という名を冠している玩具メーカーをあたってみたのだが、該当する会社はなかった。こうした商品の場合は、たとえば絵の著作権とかにあてはまらず、産業財産権（権利期間は20年、ただし継続可）に属することが多いという。おそらくこの20年間、この権利が継続されたことはないとの判断で表紙に使った。もしこれらのカードについての情報をお持ちの方はご連絡くださればありがたいのだけれども。

（香月　洋一郎）

Interview

中世鎌倉の景観を語る―私の発掘覚書―

Medieval Landscape of Kamakura

河野　眞知郎（鶴見大学文学部　教授／共同研究員）　KAWANO Shinjiro

今年度、作業班「環境認識とその変遷の研究」に加わっていただいた河野眞知郎先生に、鎌倉についての想いをお聞きしました。

―まず中世の考古学というジャンルにどういういきさつを経てたどりつかれたのかをお伺いしたいのですが。

河野　個人的なことでいえば、学部生時代は弥生時代や古墳時代の集落を扱っておりました。その頃、大学の考古学関係の講座で、中世を対象としていた所は、まずなかったと思います。ところが、大学の先輩が鎌倉市に勤めていたので、鎌倉の発掘に引っ張り出されたのです。鎌倉でも都市再開発の折に、ビル工事などに伴う埋蔵文化財の発掘調査が必要になってくる頃でした。1970年代の中頃だったでしょうか。私は考古学の遺跡発掘の経験が多かったので、「おまえしばらくやっていけ」ということで鎌倉を掘るようになりました。その頃は、考古学というと縄文や弥生という古い時代ばっかりしか習っていなかったので、中世というもののイメージさえも掴めていませんでした。ですから、出土するものが、「これはなんだ、これはなんだ」ということの連続だったわけです。青磁だ白磁だ、瀬戸だ常滑だと、種類を見分けるのにずいぶん苦労しました。

それともうひとつ、鎌倉の地層が非常に難しかったのです。関東地方の普通のところですと、弥生時代とか縄文時代の遺跡ならば、どう掘り間違っても関東ローム層に突き当たれば、そこでおしまいとなります。逆に関東ローム層に掘り込みがあれば、それを調べればよろしいという感じだったのですが、鎌倉の場合、遺跡の生活面は次々に盛り土でかさ上げされているので、層位が複雑なのです。黒土の中にある、黒土で埋まった穴の跡を見つけるのは、慣れないうちは苦労しました。でも、いったん盛り土層を見分けられるようになると、層の上下関係で時期の新旧がつかめて、面白くなってきましたね。

―では、発掘としてはもう応用問題なんですね。中世という時代を研究される場合、文書を通しての研究のほかに、一方で金石文というジャンルがありますね。板碑であるとか、宝篋印塔であるとか、この分野も、いわば「信仰の造形」といいますか、モノを扱うわけですが…。

河野　鎌倉には石造物自体は多いのですが、金石文が豊富にあるというほどでもないわけです。それと、板碑や石塔類に金石文をのこした階層と、歴史学の語る源氏三代、あるいは北条氏などとは直接リンクしないわけです。それは階層の差だけでなく、時代的に見ても、考古学資料がのこるのは、鎌倉時代でもあとの方が多いのです。ですから考古学は考古資料だけ、それから文献史学は史料だけと、わりと離れてやってきたところがありました。土層の積み重なりから、時代順を追っかけていけば、あとは文献史学の成果と、どこかでつながるところが見つかるだろうと、かなり甘い見通しを持っていたような気もします。それは甘い考えに過ぎなかったのですが･･･。

―そうすると、地層の積み重なりかたで、相対的な新旧とか構造とかいうのは出てくるんでしょうけれども、絶対的な年代というのは…。

河野　放射性炭素の年代測定ですと、ちょうど一番年代が出にくい時代に当りますね。ですから、金石文でも何でも良いのですが、紀年名資料がでてくるのをとにかく

期待するというのが本音です。それと、もうひとつ、状況証拠も期待しています。例えば、元弘3年（1333）に鎌倉が攻められて焼け落ちたということがあるとすれば、その焼けた層を探すというのも一つの手です。火災に関する記事はわりと役立つだろうと思っています。でも現実には、なかなか定点として掴まえるのは難しいですね。

―鎌倉の場合は「吾妻鏡」という一級史料がある。逆にそこに縛られてイメージを固定してしまっている一面と、それだから発展した部分と、両方あるということを前に話されていましたが。

河野　「吾妻鏡」というのはどうしても「将軍記」という性格で、将軍に関する編年体のものですから、語られるところは、社会の上部構造であって、下の方の「凡下」などという下々の人たちに関しては記述が少ないのですね。ところが遺跡の発掘では、実際にその土地に住んだ様々な人々の痕跡が出てくるわけです。遺跡には誰それの屋敷の跡です、と書いたものはのこっていませんし、時期によって居住者の交代もありえます。すると、「吾妻鏡」が述べている鎌倉と、実際に掘り出される鎌倉というのは、必ずしもぴったりと一致したりしないのです。これは当然しかるべきことでしょうけども、そのずれを何とか歴史の流れとすり合わせていきたいと、そんな努力をしています。でも、考古学資料というのは、日常生活の廃棄物、つまりゴミが主なものなので、人々の生活実態は想像できても、歴史の流れや歴史学の理論と合わせるのは、なかなかうまく行きませんね。

―中世の日常生活がある程度イメージできるような資料の発掘が体系的に行われているということになると、これは全国の中でも限られたケースになりますね。

河野　確かにそうです。草戸千軒町遺跡（広島県）や、一乗谷朝倉氏遺跡（福井県）の例が中世考古学では早くから成果をあげています。草戸千軒はかなり鎌倉と似た状況なのです。市中の人々の暮らしの跡なわけですから。一乗谷の場合には、やはり戦国時代の城下町ということで、あちこちにある城下町と較べながら、見ていけるわけですね。鎌倉の場合には中世前期の都市ですが、古代の律令都市でもなく、近世城下町でもなく、都市論的にもなかなか一筋縄ではいかないところがあります。ただし、鎌倉の町は狭い谷にどさっと資料が埋まっていて、しかもそれが何層にも重なっていますから、これは、着実に丹念にやっていけば、相当なことが分かるはずだという見通しは最初からありましたね。

―それは全国基準に持っていける性格のものと、鎌倉ゆえの地域性・社会性が反映している面と、その両方が分かれてあらわれてくるのでしょうか。

河野　そうです。鎌倉を掘りはじめた頃には、草戸千軒と比べれば、すぐになにか明らかになってくるだろうと思っていたんです。ところが、やっぱり鎌倉は鎌倉なんで、他の所と比較すると、違いは大きなものがありますね。例えば、鎌倉時代の後半になると、浜辺のほうに非常に大きな地下式の倉が見られるようになるということがあります。このような倉は、全国的に見て同じ構造の例がないんです。鎌倉のものは地中に太い角材で地下室をつくり、ときには板石で床や壁をつくっています。これは鎌倉独自のものじゃないかなと思われるんです。鎌倉の主要な居住者である武士たちは、自分のところの本貫地がありますから、当然その領地からの年貢を入れた倉とも考えられますが、中国との貿易品を納めた倉とも考えられるわけです。各地の荘園であるとか、村落遺跡と比較すると、違いは際立ったものがあります。寺跡、城跡や住居や耕地跡があって、人々の使ったものが見つかるというのとはちがっています。ですから各地の研究会で、鎌倉の事例を発表すると、それはまぁ鎌倉だけの問題じゃないのということで、拒絶反応みたいなものがあったんですが。

私は、鎌倉をやり始めてから、石井進先生・網野善彦先生といったような方々とお付き合いできまして、そのなかで特に網野先生の見方から非常に影響を与えられました。諸国を放浪する人間の存在ですとか、そういうことを考えると、はじめて鎌倉は鎌倉だけじゃなくて、各地とリンクしているのだろうと。各地との商品流通の問題は、出土品の産地同定で見えやすい一例です。鎌倉と各地との繋がりが、モノを媒介として見えるというようになりました。生産者と消費者だけでなく、流通に携わる者にも眼を向けるようになりました。

それからもうひとつ、やっぱり文献史学と歴史地理学の方法ですね。これが各地の荘園遺構を「景観」として捉えるということを多くやってきていますね。例えば地頭館の伝承地と、それからその菩提寺と、村社みたいなもの、さらに農耕地及びその周囲の百姓屋敷といったものを、一つの地域のセットとして見るようなアプローチです。これに加えて、考古学的な発掘がそういった実際の遺構で明らかにできる所も増えています。ある地域の中世の景観というものが、ある程度描き出せるようになってきている。

それでは鎌倉の場合には、どういった景観を描き出せるのだろうか。在地の者と都市に生きた者の差は何なのか。彼ら領主は武士ですから、鎌倉にお勤めにやってくる。すると、そのときに鎌倉に在地のものを持ち込むのじゃないか。また、鎌倉の中で得たものを、各地に持ち帰らないだろうかとも。こういうことで、はじめてその各地のあり方と鎌倉のあり方というのが、やっと具体的に語られるようになるんじゃないかと思います。

―鎌倉を研究されてこられて、考古学からの視点と、歴史学、文献史学からの視点と、その本質的な違いといいますと。

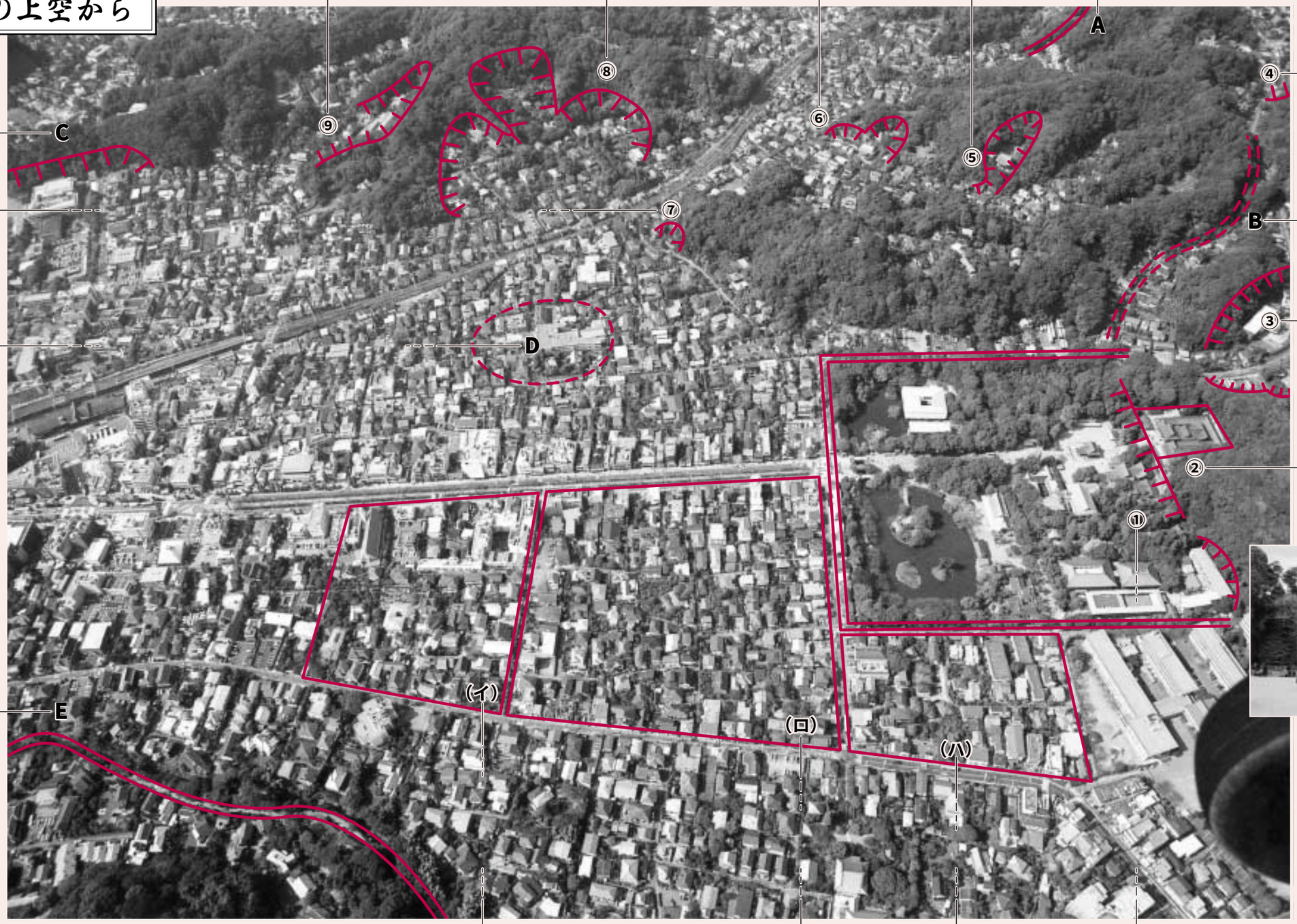
河野　これは、時間幅ですね。歴史学者の場合には、ピンポイントで何年何月何日に何があったか、いつまでにどう動いたかというプロセスが問題になるわけです。ところが考古学の場合には、定点資料といいますか、その何月何日まで絶対にわかるわけはないんです。ここからここまでの大まかな時間幅の間になにか変わったのかなぁという、物質面での変化が見られるだけなんです。その背景を考えようとする姿勢は欠かせないと思うのですが、私自身の個人的な見方かもしれないですが、考古学をやっている人の中には、その時代にどんな物があったかを、ある程度解明すればことたれりとするような姿勢になっているような気がします。とくに、発掘アルバイトに来る学生の場合には、いわゆる『発掘調査報告書』という、事実関係と出土品のリストアップさえ済めば、後の解釈は歴史学者なり、どこかのえらい先生なりがやってくれるんじゃないかと…。

―資料提供みたいな形になりますか？でも、考古学の視点からゆえの洞察力とか、生活認識というのは当然そこに出てきて…。

河野　そうならなきゃいけないんですけどね。これは、私の教育が悪いのかもしれませんが。私が最初鎌倉を掘り始めたときには、なんでこれがここに落っこって、土に埋まってるんだというところから考えはじめました。例えば家の前から何かが出てくると、どういう家の前なんだということを気にしてくわけです。次に頼るのは文献史料ですが、おそらく凡下の生活については文献史学はあまり語ってくれませんから、それでは民俗学のほうで何か似たような事例がないだろうかと考えていくわけです。町という生活空間の中で、どこでどういう暮らしが行われたかを考える際に、民俗学的な見方は欠かせないと思います。時代の流れについては歴史学と協力する。すると考古学独自の見方というのは、生活感覚からくる想像にすぎなくなってしまう恐れもあります。

―人文系の学問は、基本的にはその「想像」はひとつの軸として考えられていいと思うんですけれども、でもおっしゃられるような作業において民俗学というのはそれほど頼りにならないような一面ももっているような気がします。たとえば古いと言われてるものが意外と古くなかったり。そこのところは単に伝承されているということだけで記録をしてますから。

鶴岡八幡宮の上空から



無量寺（無量寿院か？）
谷奥は岩盤を削り出した庭園、苑池あり（13世紀半ば頃開創か？）。

寿福寺
以前はかなり広い境内地をもつ。中央谷の奥は二段の平場で、奥の崖に多数のやぐらあり（13世紀初めの開創）。

浄光明寺
山裾をかなり削って平場を造り出す（13世紀中葉開創）。

多宝寺跡
山裾を削って三段の平場を造成（13世紀中葉開創）。

亀ヶ谷坂
切通し、13世紀中には存在。

通称御成山（おなりやま） — C
東麓は奈良・平安時代に山裾を切り下げている。

窟堂跡（いわや） — ⑦
かつて岩窟あり（現在、崩落で喪失）。頼朝入府以前より所在か？

低湿地 — D
土盛して、13世紀中には宅地化。

滑　川 — E
川底には岩盤露出。

④ 建長寺
山裾、岩盤を削った造成地（13世紀中葉に開創）。

B 巨福呂坂（小袋坂）
切通し。13世紀中葉に整備。

③ 八幡宮供僧坊跡
山裾を削り、平地には厚い盛土がくり返される（12世紀末に造成開始）。

② 八幡宮上宮
山の中腹を大きく掘削して平坦地を造り出す（1191年造営）。

（イ） 宇津宮辻子幕府跡
微高地南端部に広地。四方は溝（堀）で囲まれる。1225〜1234年に所在。

（ロ） 若宮大路幕府跡・北条氏小町邸跡
微高地の中央に広地。四方は堀で囲まれる。1234〜1333年に所在。

（ハ） 政所跡
微高地の左側に立地。周囲に堀、土壁を築く。盛土造成もあり。12世紀末〜1333年に所在。

① 八幡宮三方堀
それ以前の地形を無視し、幅3m以上の堀をつくり、およびその内側に土塁を築く（13世紀初頭成立）。

①〜⑨：寺院造営に伴う地形改変跡
⌒：開削した跡が認められるところ
A〜E：交通路、流路　他
（イ）〜（ハ）：鎌倉時代の公的機関所在地

データ作成　河野眞知郎
撮影　香月洋一郎

河野　確かに、民俗学で近世を突破して中世まで遡れるものは、かなり限られるんじゃないか。鎌倉の遺跡でも、井戸埋めに節抜きの竹を入れる事例とか、胞胞埋納とか、民俗事例とかさなるものは少数みつかるにすぎません。新潟県の奥山の荘や荒川の保の場合、歴史地理学で導きだしたものが、後に発掘によって、どうにか合致しそうなところが少しずつ見えてきてますが、逆に近世の民俗誌とは合致しませんね。まぁ、考古学のほうで出してくる資料というのは、現在の地表にまで伝承されたり、あるいは文献に語られたりするものと合致しない。かといって、民俗学や文献史学とすり合わせを試みない限り、資料からの想像だけでは、必ずしも説明しきれるわけじゃないですね。

—説明しきれるという次元になると、おそらく諸分野の資料をあわせても、中世の場合にはなかなかむずかしいのでしょうが、ただ、たとえば2つのA、Bの資料があって、これを前提としてこう考えるのが一番自然だというある洞察の方法を出していく。で、新たにCという資料が見つかった場合に、ひとつ資料が増えて洞察の方向がちがったとする。そんな時、AとB2つの資料しかなかったときの洞察力や方向性が、それでまったく無意味にはならないような気がするんですが。データ2種類の時はこんな風に類推できる。でも資料が3つ4つと新たに出てきたら、こういうふうに類推できるという洞察力の方向性自体は、新しい資料が発掘されて結果が変わっていっても、それはそれでひとつの凡例的な叩き台として力を持つような気はするんですけれども。

河野　考古学で「成果」を求められると、当りを求めすぎちゃって、例えばAかBかどちらかに決めつけるような、結論を急ぐところがある。そこにCというものが出てきた時に、これはAとうまく当るか、あるいはBとうまく当るか、さらにAとBのどっちも正しくないのか、というように落ち着き先を求めすぎちゃうようです。AでもなくBでもなく、あらたにCを加味して考えるという方向に行けなくて、その当り外れにこだわってるところがあるんじゃないかと思うんですね。

—そうすると例えば、新たに資料Cがでたということで、それを含めてひとつの体系をだして、それ以外の体系とすり合わせて、方法として戦わせるんじゃなくて、合致点といいますか、そこがすごく関心事になるという？

河野　そうです、そこが気になる。例えば、霜月騒動で殺された安達泰盛の屋敷跡の比定地を、今日の甘縄神明社のそばに求めるのか、無量寺ヶ谷の方に求めるかというとき、今小路西遺跡（御成小学校内）の位置づけは、当り外れの方に話が行ってしまう。当りを探し続けすぎて、それがためにCという資料を解き明かすためのパラダイムみたいなものが作れなくなる。そうするとAとBの枷からも離れられない。そのへんが今、考古学が陥っているところじゃないかと思うんです。

—鎌倉の場合は特にそのプレッシャーは強いんでしょうね。

河野　例えば大倉幕府、若宮大路幕府というのは、ここでなくてはいけないという思い込みが強いわけですから、そこを掘って、ちょっと違うようだなと思っても、疑問を解き明かすより、当りか外れかに行ってしまう。もうどっちにも行けなくなっちゃうんですね。

—では検討、模索を前提とする積極的な意味でのペンディングというのは嫌われるようになった…。

河野　成果が求められるから、発掘している人たちも何かに結び付けたくなるんでしょう。となると、ある程度広がりのある街中で、何層も積み重なっている遺構面を着実に解きほぐしていくという作業に、じっくり取り組んでいられないんですね。悪く言えば、功名争いみたいなことになってしまいます。

—鎌倉の場合は鶴岡八幡宮があってその前に海の方向への大路が通ってる、それ自体は基本的には変わっていない…。

河野　基本は変わってないと言えるんですが、大路の段葛の玉石積みなど、近世・近代以降加わったものを除いていくという手法で、確かめていけると思います。

—地層が重なっているというのは、これは人工的な作用が多いんですか？

河野　ええ、それはかなり人工的なもので、今年度のCOE年報に書いたもの（「中世都市鎌倉の環境—地形改変と都市化を考える—」）が、いわゆる都市化にともなう地形改変の問題です。山を切り崩し、谷を埋め立て、それで新たな環境を創出しているんです。それを実地に即して解き明かしてみたいということで、さまざまな手法から見えてくるところをとりまとめてみたんです。

　ただ、やはり文献史学なり歴史学なりが言っているように、鎌倉は政権的なあるいは軍事的な都市であるという枠がありますから、誰が主体となってそのようなその新たな環境、ないし生活領域を確定していったかということは考えなくてはならないわけです。環境変化という自然史的な捉え方だけではできないはずです。そこをうまく埋めていくのは、なかなかむずかしいものだと実感しました。

—鎌倉幕府が滅んだ後、あの谷は鶴岡八幡宮の門前町としての生命力がそののちもずっと続いてきたということになるんですか？

河野　その時々の生命力の強弱はありましょうが、続いてはいますね。南北朝期における足利氏の鎌倉御所や、足利氏に安堵された寺であるとか。むしろ寺町として残っていった側面が強い。八幡宮もその後、小田原北条氏などの庇護を受けてかなり造作をやっております。中世の間の動きと、その後の近世以降の動きというのは、考古学的な資料としてとらえることができます。それらの時代を確定しながら、「その後」に加わったものを剥いでいくことによって、鎌倉時代ないしは中世前期というものを、より浮き彫りにできればと思ったんですが。

—前にお話を伺ったときに、近世以降の鎌倉というのは、あまり研究者がいないと…。

河野　文献史学はともかく、考古学では、南北朝以降もそんなにいないですね。鎌倉というからには鎌倉時代が中心課題で、それ以降の時代は研究してもうま味がないようで…。

　ですから今回の年報の原稿でふれたかったのですが、結局力及ばなかったのは、近世、ないし中世後期の紀行文などから、もう少し景観的に読み解いていくことでした。あるいは近世に、鎌倉観光のための絵図が随分出版されていますが、その読み解きとか、それから地境などのわかる村絵図、こういったものを読み解きながら、それをも鎌倉の土地に刻まれた様々な痕跡と見て、中世前期まで遡る少しまわり道的なやり方もあるんじゃないかと思ったんです。

　土地に刻まれたということで、実際に鎌倉時代に限定できるような加工の痕跡を絞り込むことも考えました。例えば寺の場合でしたら、創建時に相当の工事をしますから、寺絵図、現地に残っている様々な構築物、あるいは金石文などから、ある程度年代を絞り込んで、中世のものを洗い出していったわけです。その結果、寺とか墓

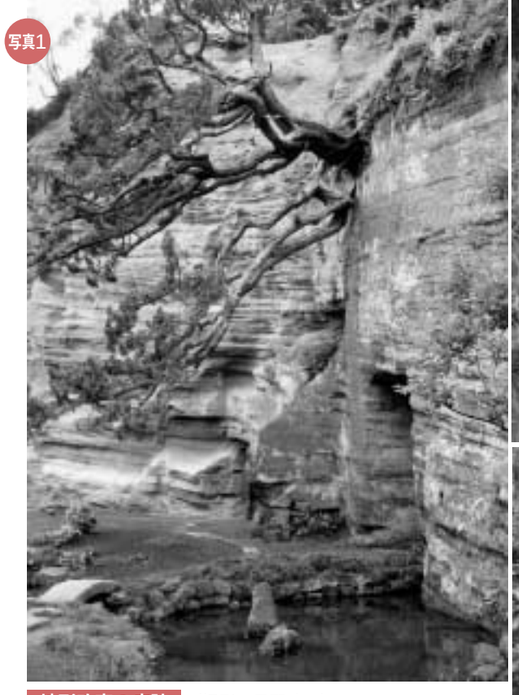


写真1

写真2

写真3

地形改変の痕跡　（撮影　星野玲子）

写真1：寺院創建期に開削されたであろう崖（浄光明寺境内）
手前の池は最近の構築だが、崖下にはやぐらが掘り込まれている。

写真2：報国寺奥のやぐら群
山腹の崖に掘り込まれた岩窟形態が特徴。

写真3：建長寺奥の尾根線にある石切跡（十王岩近く）
時期不詳であるが、近世のものらしい。

を作るために山が切り崩された土砂が谷を埋めるのに使われて、そこに人工的な環境ができてくる、それが都市化、都市の拡張の結果だと、今回年報に書いたわけなんです。

そうすると、確かに鎌倉時代になされた工事跡ばかりでなく、近世・近代に加えられた痕跡もかなりあって、それが区別されずに、「三方を山に囲まれた、防禦に適した鎌倉の地」という、昨今の人々の認識を形作っているような気がするわけです。

一方、鎌倉時代の都市開発による生活圏の広がり、都市内の土地利用、その実行者を明らかにするということも、逆照射されるだろうと思ったんです。

―そんなふうに近現代、そして近世の衣をずっと剥いでいくという発想、身近な時代から一枚一枚剥いでいって、発掘される中世にどんな意味があるかというのは、これはある意味では通時代的な発想･･･。

河野　発想というより、枠組みの解釈の仕方かもしれません。都市史という面では、どうしても鎌倉は、それまでの律令体制とはちがう武家政権の都です。するとそこにかかわった人たちの考え方というのは、必ずしも奈良、京都を下敷きにしない発想だったろうと思うんですね。各地の荘園の簒奪者にして在地領主である武士たちが集まってきて作った都市なんで、そこにある発想というのは、各地との比較対象になるものは少なくないんじゃないかと思います。しかし、実際につくりあげられたものは、各地の寄せ集めではなかったわけです。どう動いて何をしたら鎌倉という都市は成立したのか、解き明かしたいですね。

ひとつは新しいものを取り去ることもやったんですが、もうひとつは過去からの、例えば古墳をつぶして平地が拡げられてるとか、律令の郡衛跡が宅地化されるなど、平安以前からの変化も考えてみました。これは考古学のほうの得意技なんですが。両者をあわせても、やはり鎌倉時代に一番多く手が加わっているのがある程度はわかってきました。

今回は環境の変化ということに重点を置いたので、いわゆる流通とか、各地との交流ということに関しては、あまりふれていません。考古学のほうのモノは、中世では非常に広く動くんです。例えば焼き物ひとつとりましても、もう広域に流通する商品生産をやっているのです。かつて、民俗学で常民という考え方が設定されたとき、

定着して自給自足的な経済が、かなりイメージされていたはずですが、現実はもう中世の段階で、都市でなくてもかなりモノは動いて、しかもお金でモノを買っているのです。網野先生がよく言われていたように、「百姓」は農民とイコールじゃないんだということ。山野河海における活動や様々な職能民の存在とその移動といったこと。すると鎌倉は生活物資さえもほとんどは、周辺地域をこえた外から搬入されてくる、ないしは買ってくる。列島規模に立脚した消費都市に成長してしまうわけです。

ですから環境問題ということを考えた場合でも、例えば鎌倉で食べ物の滓がでてきますが、この食べ物のルーツは、決してその鎌倉の周辺からとは限らないと、私は常々主張してきました。ところが、鎌倉の町が衰退する15世紀のものなんですが、永福寺奥の谷で、武家屋敷らしき跡が見つかり、そこの井戸からは鹿の骨がいっぱい出ました。それと一緒に弓の折れたものが出ました。狩猟の結果としての鹿の骨があったと理解できるわけです。ところが、この鹿の骨を動物学者に分類してもらったところ、雌や子供の鹿だとかが入っていて、個体として狩猟対象にする立派な雄鹿ではなかったのです。となるとこれは、食害問題、つまり農作物を食べに来る害獣としての鹿を、排除する狩猟であったと、指摘できるんですね。

都市というのは消費的な場であり、それを支えるためにはヒンターラントというような周辺領域だけじゃなくて、遠隔地から物資を供給しなきゃいけない、そのための流通経路も考慮しろと、歴史学にしろ考古学にしろイメージとして持っているんですが、微視的には建前どおり行かないこともありそうです。

地域の周辺環境から少しは取り入れたものとして、「鎌倉石」の問題もあります。お寺のお堂を建てるための土台石は安山岩で、かなり遠くから運んでくるんです。それから太い材木などもかなり遠くから運んでくるわけです。しかし、近隣でとれる山の石材、あるいはその崖を切り崩したときの土砂も土木建築の重要な資材になっています。近世には鎌倉石と呼ばれる凝灰岩は、地元で手に入るものです。これを土台石や石垣や溝の縁石などに多く活用しています。

それから、食物の滓としての貝殻も出土しますが、これも各地から商品として運ばれてきた粒の揃ったものと、その辺の海で採ってきたような小さなものとがありますが、やはり近辺の環境から少しは得ているものもあるのです。その辺は今回の原稿では、こまかなモノのほうま

大仏様の上空から

佐助（佐介）ヶ谷 A
13世紀には寺・宅地できる。

松ヶ谷 B
13世紀に寺院・宅地に。

佐々目（笹目）ヶ谷 C
13世紀に宅地に。

大仏殿背後の山（崖） ②

大仏坂切通し ⑤
13世紀には所在。

（ロ）～（ホ）
人骨集中地点
13世紀から14世紀にかけての遺体遺棄、集積ないし墓地。

乙
砂丘地帯の高まり
古代：東海道走るか？
中世：13世紀後半から14世紀にかけて地下倉が数多く造られる。

④
崖を切り、裾に「やぐら」
荼毘跡あり。盛土の平地には町屋らしきものができる。

① **大仏（大仏殿）**
13世紀中頃に開創。

③ **大仏殿参道（推定）**

データ作成　河野眞知郎
撮影　香月洋一郎

The excavations in Kamakura have given us various kinds of products and goods that were in this town in the middle ages.
Many samurais who lived there produced nothing, but they bought and owned much.
So, it is natural for various goods to have been bought to the city.
We think Kamakura was not the only place to have had such a characteristic.
There must have been other towns and cities where goods were collected and distributed.
They were, in a sense,“ small Kamakuras ”.
The moving of products and goods made various-sized distribution centers around the country.

で立ちいらなかったのですが。鎌倉の流通を問題にするときには、日本全国にわたるマクロな面と、もう少しミクロな実態がありそうですね。量的にはマクロなものが圧倒的ですが…。

—それだけモノが流通してたというのは、鎌倉ゆえの磁場がすごく強いのか、それともおそらくそういう性格の土地自体があの段階で全国いろんなところにあって、それゆえに鎌倉も同性格であるが大きな存在としてあった、そう考えたほうが自然なのか、どちらでしょうか。

河野　それについては、やはり鎌倉幕府と在地の武士との関係から考えなければならないでしょう。幕府の下に均質な御家人が集結していたというのではなく、鎌倉後期になると、北条得宗が各地に勢力を伸ばします。その中で北条氏の祈願寺を作っていくのです。するとその祈願寺になったところには、どういうわけか鎌倉と同じような奢侈的な出土品が見られる。これは考古学的にモノがでるということにすぎないのかもしれないけれど、鎌倉と地方のストレートなつながりが意外にあったんじゃないかと思えます。

私は10年ぐらい前までは、「鎌倉ブラックホール論」というのを言っていまして、鎌倉というのは何でも各地からのものをのみ込んでしまうだけで、地方にちっとも出さないじゃないかという話なのです。だから鎌倉と地方は比較しずらいんだよと言っていたんです。ところが最近、各地に「小鎌倉」と言って良いような、鎌倉と直接人の行き来なんかがあるところが見つかって、そこへは純粋鎌倉的なものがポンと入っていくようなんですね。そうすると、中世に商業流通が盛んになると言いましても、それはベタ一面にという形ではなくて、やはりその時の人々の関係のなかで特徴的に形作られるんじゃないかという気がしています。

—でも、その「小鎌倉」的なものの土地の性格や痕跡というものは、時代が変われば流されていく性格のものでもある…。

河野　その土地の支配者が変わって、鎌倉との関係の薄い誰かにとられてしまうと、鎌倉的でなくなる可能性はありますね。

鎌倉にとって各地域の生産者、ないしは生産の統括者である武士、つまり地方領主は、鎌倉に来るのはお勤め人としてなんです。であれば鎌倉というのは、基本的に消費生活のみで成り立つ都市と考えてもいいんじゃないかと思いますね。ただし、消費のための原材料を運んできて加工したりする職能民の存在がなければ、消費都市は成り立ちません。地方の武士たちが、自分の本貫地から鎌倉へ、食料からなにから必需品を全部運んできてたというふうにも思えないんです。そういう経済的な問題をやろうとすると、まさに文献のピンポイントでいけるような良好な史料はそうそうないでしょう。また、民俗学で「鎌倉街道」伝承が残っているところも、どれだけ古く行けるかわかりません。現状は、ものの組み合わせから想像しているわけです。

—ただ、それ以外に考えられないとか、こう考えるのが一番妥当だという叩き台としての方向性は、資料とのつきあいの中でなにか出てくるのが自然だと思うんですが。

河野　ええ。そうなるべきですね。私自身は想像を何種類かの仮説として立て、資料を細かくあらうなかで、一番妥当じゃないかなという落ち着き先を見つけようとしています。

—鎌倉付近の民俗報告書を読みましても、中世に栄えた鎌倉だからこの民俗があるというような性格は、どうも見えにくいような気がします。基本的にもう神奈川県のあの地域の、ひとつの民俗伝承地という面しかでてきにくい。だから逆にそれを「鎌倉」ということに結びつけるとすごく不自然な感じもするんですね。でも鶴岡というお宮があって、あそこにこう大路があってというのはおそらく中世から何百年と続いてきているわけで。そうするとどうしてもあるバイアスをかけて民俗資料を読んでみたくなる部分も出てくるんですけれども。

Kamakura is located in a complex valley.
There is a big main valley in the center that faces the sea and around the main valley, there are many smaller ones.
In the center of the main valley is Tsurugaoka Shrine, which is the main landmark in Kamakura.
In almost all the small valleys around the main valley, shrines on temples have been built.

河野　鎌倉の民俗で残っているかなと思われるのが、祇園社にあたるかという八雲神社の祭礼の行列が、かつて足利公方のいた浄明寺のあたりまで行ったんだという伝承です。それでもこれは、中世後期に関してのことで、さらに近世の祭礼の中に投影しているようなものでしょうね。このへんのことは、藤木久志さんが戦国史の見方でやっているなかで、「どっこい鎌倉は生きている」と言われるけれども、それら伝承が鎌倉時代まで遡れるかとなると、まぁそう確実ではないですね。また鎌倉内の土地の小字名や、あるいは土地の言い伝えというのも、近世の名所の説明みたいな感じですね。鎌倉の考古学的成果と確実に結びつく、そういう言い伝えというのはちょっとないですね。

—鎌倉をテーマとして研究なされて、これから枝を伸ばすとすれば、ある程度関東、そしてその外縁の地域をヒンターラントというふうに考えて、そうした地方にアプローチするほうが魅力があるのか、それとも全然違う西日本の鎌倉的なものに関心が向くのか…。

河野　これが難しいのは、鎌倉にいた武士が、新補地頭をはじめとして各地に散っていくんですね。特に西遷御家人もいっぱいいます。この連中は結構一族の間でネットワークを作りながら各地に行ってるみたいなんです。これは五味文彦さんが指摘しています。また、後世の武士たちは、「鎌倉以来」ということが彼らの誇りになっているみたいですね。そうなると、関東を鎌倉のヒンターラントとみるよりは、人とモノのネットワークを非常に広く、日本列島全体に広げて見る必要があると思います。

—鎌倉的なものとは何か、というテーマになるんですね。

河野　ええ、国立歴史民俗博物館の小野正敏さんが言うのですが、焼き物のうちに「威信財」というのがあるんだと。武士の威信を表す特別な品々なんです。床の間飾りに青磁の花瓶がなきゃいけないとかですね。戦国時代には中国から染付が輸入されているけれども、ずっと昔の高級品がステータスになっているんです。それから茶道具もそうですね。

ところが、北日本のほうへ、特に東北北部から北海道へ行くと、中世後期にはお茶であるとか、庭園であるとか、あるいは連歌などをやる空間とかですね、そういうものがあんまりちゃんとしていないそうです。で、なぜかというと、領主の周りにいる住人たちがそういったものに価値を認めないからじゃないかと。

旅行の宣伝で各地に「小京都」と言われるところがありますね。西のほうでは、大内氏の山口であるとか、大友氏の大分ですとかね。小京都といわれるように京都の文化を持ってきて、まわりの連中のなかでお屋形様ともてはやされたらしい。北のほうはそういう装置がなくてもいいんだというのです。

鎌倉的な威信財を持っていって、それが通用するところと通用しないところがある。西のほうは全部通用しているんじゃないですか。でも西のほうは王朝の文化の強みもあって、鎌倉の威力はそう大きくないかもしれません。それから、武士の文化というと、酒盛りのうつわとして「かわらけ」を使うのですが、東北のほうではかわらけを持たない地域もありますね。

—では、鎌倉というものをひとつのメルクマールにすると、東北というのは少し違ってきますか。

河野　実際には東北は、北条氏が相当力を入れていますし、恐らく北海道南部も視野に入れていたと思うんです。でも鎌倉時代には点と線のつながりで、むしろ南北朝の争乱の頃、後の東北文化をになう人々が広まっていったようです。津軽の十三湊の発掘を見ますと、ああこれは海の民と言うべきものなんだと思います。地域史という限定ではなく、人とモノのネットワークで広くとらえるといいんじゃないでしょうか。

かつて鎌倉で経験を積んだ武士の末裔が各地に散ったわけですから、鎌倉を明らかにするのが、武士のルーツを明らかにすると、言ってもいいかと思います。

はじめは武士が集まって鎌倉という都市を作り上げたはずなのに、じゃあ鎌倉のなかでできたのは何なのかと、問わなければならないでしょうね。各地に散っていく武士たちがひきずっていた鎌倉らしさとは何なのかと。これは考古学だけでは結論は出せないと思います。いろんな分野の人が集って、議論百出して良い問題です。「鎌倉学」というようなものがあってもいいんじゃないでしょうか。

（2007年1月15日　於COE共同研究室、聞き手：香月洋一郎　記録：土田拓）

『絵巻物による日本常民生活絵引』マルチ言語版編纂における問題

Problems in the Compilation of the Multilingual Version of “ Pictopedia of Everyday Life in Medieval Japan ”

研究エッセイ

君　康道（東京大学大学院総合文化研究科　専任講師／共同研究員）　KIMI Yasumichi

1 はじめに

神奈川大学21世紀COEプログラムも4年目が終わろうとし、いずれの課題も大詰めの時期を迎えている。私が関わらせて頂いている『絵巻物による日本常民生活絵引』（以下『絵引』と略す）マルチ言語版編纂の課題も、いよいよ第一冊目の刊行に向けて現在その詰めの作業を日々行っているところであり、本誌が出る頃とほぼ時期を同じくして、この『絵引』マルチ言語版も世に問われることになるのではないかと思う。

2003年の本COEプログラム開始から丸4年、『絵引』全5巻のうちわずか1巻を編纂するためにこれだけの時間がかかっていることに対し、厳しいご意見やお叱りがあることは事実である。しかし逆に考えれば、それだけ時間のかかる作業が我々に課せられている、ということもまた事実である。特に翻訳者に翻訳して頂いた文章の校閲作業が予想以上に困難を極め、作業の半分以上はそこで直面した様々な問題に対処するために費やされた、といっても過言ではない。それではいったいどのような問題が挙がっていたか、ここではその一端をご紹介してみたいと思う。なお課題グループメンバー全員が関わっている校閲作業はマルチ言語版の中心となる英語訳についてのみであり、本稿も英語訳に関わるものであることをあらかじめお断りしておく。

2 編纂作業の進め方

編纂にあたっては、『絵引』マルチ言語版の英語訳を課題グループメンバーのジョン・ボチャラリ氏を中心として、大学院歴史民俗資料学研究科在籍の留学生や他大学大学院の留学生など計5名の方々に分担をして依頼をし、訳出されてきた文章を課題グループメンバー（前田禎彦、ボチャラリ、鈴木彰、金貞我、君）全員で校閲し、そこで内容の確認・検討や訳語の統一といった作業を行ってきた。自明のことではあるが、我々が作業を進めているのは澁澤敬三編の「オリジナル」の『絵引』をマルチ言語版として編纂することであり、我々の「新た」な『絵引』をマルチ言語版として編纂することではない。その点に注意するため、翻訳及び校閲作業にあたっては、以下の3点を「原則」として掲げた。

Ⅰ　出来るだけ原文に即して忠実に翻訳する。

Ⅱ　絵引の絵を基本としながら、そこに描かれたものに妥当な訳語を与える。

Ⅲ　極力日本語をそのまま残さないよう、原文を適当な訳語に置き換える。

しかし原則というものはなかなかその通りにいかないのが常で、この『絵引』マルチ言語版とて例外ではなく、「原則に当てはめて考える」ということに大変苦慮した場面に実際何度も直面した。

3 「あみ衣」は今でも一般的か？

例えばオリジナルの『絵引』第2巻「196 あみ衣」に、以下のような記述がある。英語訳も下に併記してみよう。

> 「右端は一遍である。法衣の上に着ているのはあみ衣である。（中略）そしてこのような衣類はいまも新潟県中魚沼郡の山中、秋成地方にのこっており、アンギンといっている。（後略）」（新版p.78）
>
> Ippen is to the far right of the picture, wearing *amiginu* over his priestly robes.（中略）This kind of attire still exists in the mountain area called Akinari in Naka-uonuma County, Nīgata Prefecture, where it is called *angin*.（後略）

校閲では、こうした原文と訳文との合致を検討することが、第一の作業となる。上記の場合、本文と訳文の間の記述内容に相違はないと思われる。しかしここで問題となるのは、その記述内容それ自体についてである。この文章を一読すると、あたかも現在もこの地域では「あみ衣」が一般的に用いられているような印象を受けかねない。果たしてこのままで良いのだろうか？

『絵引』「196 あみ衣」の項。本文、訳文、そして絵と、それぞれを照らし合わせながら校閲作業は進められる。わずか1項の検討に数時間費やさなければならないこともしばしばであった。

4 原文に手を加えるべきか…

『絵引』は最初の刊行が1964年（角川書店刊）、現在も版を重ねている「新版」（平凡社刊）が1984年と、いずれも世に出てからかなりの年月を経ており、そのため文章の中には現代にも果たして通用するかどうか疑問に思う点も少なくなく、このあみ衣の例もそのひとつである。こうした文章をマルチ言語版ではどのように対処するか、校閲作業中にメンバーの間で多くの議論が交わされた。考えられる方策は主として二つ、①内容に疑問のある箇所もそのまま訳出する、②疑問のある箇所は加筆修正を行う、いずれかである。本来ならば学術資料として記述内容に誤りが認められることは決して許されることではなく、正しい情報を伝えるために、この場合も②の案を採用してそれなりの修正が加えられるべき、ということは当然誰しも考えよう。しかし先にも述べた通り、我々の作業は「オリジナルの『絵引』のマルチ言語版を編纂すること」である。一語二語程度の修正ならばともかく、この程度の修正を行う場合には、数行に渡っての文章の変更が必要となろう。そのような変更を加えた場合に我々が恐れたことは、修正箇所に我々の「意思」が入り込み、そこから文脈そのものが本来の執筆者の意図から外れていき、その結果「別物」の『絵引』が「オリジナル」の『絵引』のマルチ言語版になりすまして世に出てしまう、ということであった。こうなると本来我々が遂行すべき課題とは大きく異なってしまうことになる。そのように考えるとやはり①の案を採用し、内容には手を加えずにそのまま訳出するのが無難ということになってくるが、その場合は結局のところ「情報内容の正確さ」という問題点にまた舞い戻ってしまうのである。

5 「『絵引』の方法の紹介する」ということ

このように、①、②いずれの方策をとっても一長一短がある。しかしもう一度原点に戻って考えてみると、『絵引』マルチ言語版編纂は、『絵引』が本来持つ「内容」や「方法」そのものを広く世界に紹介する、ということが主目的であった。「内容」とともに世界に類をみない『絵引』という「方法」は、『絵引』がもつ独自性の何者でもなく、ここにこそマルチ言語版を編纂する意味がある。結局このことを根拠として、最終的には「原則Ⅰに従って加筆修正は行わず、この文章をそのまま訳す」という結論に落ち着いた。当然この場合は「情報内容の正確さ」についての問題が生じ、マルチ言語版の利用者が記述内容を鵜呑みにして誤解を招く恐れは十分に考えられる。そのような過ちを引き起こさないためにも、刊行の際には上述したような編纂目的や、「本文を忠実に翻訳したがために、多少の誤りや現代にそぐわない記述内容が含まれている」ことを序文や凡例などに明記して、十分注意を促すような対策を講じることとした。

6 むすびにかえて

以上は編纂過程でぶつかった諸問題のほんの一例に過ぎない。今回は紙面の都合で割愛せざるを得なかったが、先に挙げた翻訳・校閲の原則のⅡ、Ⅲに関連する訳語の問題などには無数とも思えるほどに直面し、我々の頭を悩ませ続けた。正直こうした問題を「それほど大した問題ではないのではないか」と考えたこともあった。しかしCOEプログラムの一環である以上、そうした考えはやはり「ご法度」である。第一冊目の刊行後も次巻の刊行に向けて、最終年度も我々の作業は続けられるが、早ければその作業中にも第一冊目の批評が少なからず耳に入って来るかもしれない。果たして我々の試みがどこまで通用するのか、少し戦々恐々とした心持ちである。しかしいかなる批判を仰ぐことになろうとも、気を緩めることなく出来るだけ大きな成果の結実に向けて、事業終了まで作業に従事していかなければと考えている。

注）本稿は2006年度COEプログラム第4回全体研究会（11月10日）での報告の一部を基にして纏めたものである。また文中の英語訳は、翻訳に携わって頂いた方々のうちの一人、中井真木氏（東京大学大学院総合文化研究科博士課程）が元訳を担当されたものである。

写真から人口現象を読み解く

Every Picture Has Various Kinds of Information

研究エッセイ ESSAY

平井　誠（神奈川大学人間科学部　助教授／共同研究員）　HIRAI Makoto

昨年4月から本プログラムに加わった。研究会やシンポジウムに参加する中で、景観やそれを写し取った写真資料について改めて考えることが多かった。

私は、少子化や高齢化など様々な人口現象の地域性に注目する人口地理学を専門としている。分析の際に人口統計を用いることが多いが、闇雲に統計データを使うわけではない。対象地域に入り景観を観察し、そこに現れた地域の人口特性をヒントとして分析に入ることも多い。そこでこの小文では、2006年9月に科研費の調査でアメリカ合衆国フロリダ州を訪れた際に撮影した写真から、地域の人口特性が空間に現れた例を紹介してみたい。

写真1は、フロリダ州のタンパから北西に70kmほど離れた地域に位置する住宅地域の入口である。このコミュニティは警備員が常駐するゲートが設置されているのみでなく、看板から分かるとおり居住者が55歳以上に限定されている点に特長がある。このように居住者を高年齢層に限定した住宅地域（リタイアメントコミュニティ）の多くは、住宅のみでなくゴルフ場やプールなどのスポーツ施設、編み物や模型など各種の活動を行うためのクラブハウスも備えたものが多い。退職後の生活をスポーツや趣味などに活用しながら、ゲートによって安全を守られた生活を得ることができる。フロリダ州をドライブしていると、このコミュニティと同様に「Senior Community」、「55+Community」などと記した住宅地を数多く見ることができる。アメリカは高齢期に入ってからの居住地移動が盛んであるが、一般的に冬の寒さが厳しい北部地域から冬でも温暖な南部―いわゆるサンベルト地域―へ向かう方向性が存在している。国土の南東部に位置するフロリダ州は北部からの高齢者を受け入れる主要な到着地の1つであり、その結果、フロリダ州の高齢人口比率（17.6%）は全国（12.4%）を上回っている（数値は2000年人口センサスによる）。リタイアメントコミュニティは流入者の新たな居住の場として機能している。写真1に示された看板は、高齢者の流入地域というフロリダ州の特性を示しているのである。

写真2はタンパから東へ50kmほどの道路沿いに位置する果物の直売所である。フロリダ州は降水量が多く気候も温暖であるため、果樹や野菜の生産が盛んな地域である。写真にもバナナやパイナップル、トマトなどが写っている。写真の奥に女性がかがみ込んでいる姿が映っているが、そこにはトゲを抜いたサボテンが販売されていた（写真3）。乾燥地域に生育するサボテンがここで販売されているのは奇妙な感じを受けるが、この写真からは異なる食文化の流入が推測される。つまりサボテンを食材として利用する乾燥地域からフロリダ州へ人口が流入し、彼らの定着とともにサボテンも商品として販売されるようになったのではなかろうか。フロリダ州は、非合法の入国者も含めヒスパニックの比率が高いことで知られる。とげ抜きサボテンの写真からフロリダ州における人口構造の変化を考えることができる。

写真を用いて分析する方々には当たり前のことを書き連ねてしまったが、統計数値で語ることの多い人口現象であっても、景観や写真を読み取ることで地域性を理解する手がかりを得ることができる。本プログラムでも写真資料が1つの核となっているが、そこから何を読み解くことができるのか、楽しみにしている。

写真1　リタイアメントコミュニティ入口

写真2　タンパ郊外の果物販売所

写真3　トゲを抜いたサボテン

Field Note

性とジェンダーをどうとらえるか

―人類文化における普遍性と特殊性の一事例研究―

國弘　暁子（COE研究員・PD）　KUNIHIRO Akiko

儀礼を通じて男性が女神の帰依者となるインドの「ヒジュラ」は、従来しばしば性とジェンダーの二元論を超えた「第三のジェンダー」として捉えられてきた。私は、これまでの論文や研究発表において、ヒジュラを「第三のジェンダー」と見ることに異議を唱えてきた［國弘2005；2006］。その理由は、男女の性の営みにより親族を持続させようとする人々の願いを叶える役割をヒジュラは担うからであり、人類文化に普遍的とみなされる二元論を覆す「第三のジェンダー」とはいえないからだ。インドの地域社会に生きる人々は、親族の系譜を持続させることを重視する。そのため、結婚適齢期を過ぎた男女を抱える親族、そして子のできない若夫婦の親族は、みな女神の力にすがろうと女神寺院を訪れる。女神寺院で祈願を終えた者は、そこで遭遇するヒジュラからも女神の恩寵を受ける。また、ヒジュラも子の生まれた家や結婚式場に出向き、人生の門出に女神の恩寵を授ける役割を担う。つまり、ヒジュラは、自ら男性として担うべき義務を放棄し、女性のような装いをし、しかし女性とはならずに女神に帰依する者であり、男性と女性との性の営みによって可能になる親族の持続を祝福する立場にある。このようなヒジュラの存在意義に焦点を合わせて研究することは、「第三のジェンダー」の追究に向うのではなく、かえって人類文化における性やジェンダーにおける二元論の普遍性を浮き彫りにすることに貢献するのではないだろうか。

インド社会でも重視される親族の持続とは、川田順造の言葉を借りれば、「『己』とその拡大された『同類』」の「パーペチュエイション」［川田2001：12］と見ることができる。「己」と「同類」のパーペチュエイション＝永続化とは、「己」とその拡大された「同類」を、少しでも長く存続させようとする志向であり、「同類」の存続は生物的性差がもたらす生殖によって実現される。この永続化の志向は人類文化に普遍的なものであるが、それを実現するプロセスや、その捉え方や表現は、文化による差異が著しく、特殊性を帯びる。同様に、永続化に資することのないヒジュラのような人々の捉え方も、文化による特殊性を帯びることとなる。この永続化における普遍性と特殊性を同時に問題にするところに、私はインドのヒジュラとブラジルのトラベスチの比較研究の原初的な意義を見出し得ると考えている。昨年11月に神奈川大学と交流提携を結ぶブラジル・サンパウロ大学日本文化研究所に赴き、ブラジルのトラベスチTravestiに関する調査の足掛かりを得ようとしたのもこのためであった。

サンパウロ大学日本文化研究所のスタッフは、当然のことながらトラベスチに関する調査とは縁遠い人々である。彼らは私の研究テーマをはじめは快く受け入れてくれなかったが、その理由として挙げたのは、トラベスチとの接触を試みる調査は非常に危険であり、そこに同行できる教員や学生がいないということであった。

現地の人々から危険視されるトラベスチとは、transvestir つまり、「装いにおいて男女の境界を超える」という動詞の派生語であることからも明らかなように、女性のように装う男性である。その多くが、夜の街路上で男性客を見つける売春業に従事する。なかにはメディアで活躍するほどの知名度を獲得したホベルタ・クローゼ Roberta Close［Rito1998］のようなトラベスチもいるが、それは稀なケースと思われる。トラベスチは単なる異性装者ではなく、女性の名前、女性のような服装、髪型、化粧、言語を取り入れ、女性ホルモンの摂取やシリコンの注入によって女性的な身体特徴を獲得する。しかし、女性としての自己認識を持つことはなく、男性の性欲の対象となるように自己を作り上げる同性愛者とされる［Kulick 1998:5-6］。トラベスチは去勢しないため、女性と性関係を持つことも可能である。その場合は女性同性愛のような関係であるとも言われる［Denizart1997:170］。

私の受入教員となった文化人類学者の森幸一教授は、トラベスチに関する短期調査に対して全面的に協力をしてくださり、トラベスチに関連する研究に従事する社会学者やゲイパレード協会への聞き取り調査を準備してくださった。ゲイパレード協会スタッフとのインタビュー

写真1

写真2

写真3

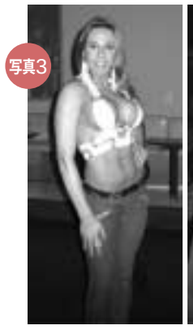


写真4

写真1：生後10日目の赤子を抱き上げるヒジュラ
写真2：女神寺院で女神の恩寵を与えるヒジュラ
写真3：ダンスクラブのショーに出演しているトラベスチ
写真4：同性愛の男女が集まるダンスクラブにて

では、ブラジルの同性愛の世界に生きる人々から話を聞くことができ、参考になった。とりわけ興味深かったのは、同性愛者という大きな枠組みのうちに、ゲイやレズビアン、そしてトラベスチや両性具有者も含まれるということである。

ブラジルの同性愛者に含まれる人々の中でも、特にトラベスチは差別の対象となっている。トラベスチの多くは、家族からも社会からも追放された人々であり、惨めな人生を歩む運命にあると見なされている。このようなトラベスチに対する差別意識の問題は、ブラジルの社会学者たちが「傷つき易さ」をトラベスチ研究で重視していることからも明らかであろう。その一方で、カーニバルという異性装がもてはやされる祝祭行事とトラベスチとを結びつける見方もあり、ブラジルの基層文化におけるトラベスチ現象の根深さを垣間見ることができる。それが現実にすべてのトラベスチにあてはまるかは別問題であるが。

このように、ブラジル社会ではトラベスチを排除しながら、別の状況では受け入れるという二面性が見られる。この二面性の検討を通じて、ブラジルにおける「男性」と「女性」の概念を問い直し、さらには非日常性という面が強調されがちなカーニバルの本質に異なる角度から光を当てることができるのではないかと考える。

特殊な現象に見えるブラジルのトラベスチであるが、それを文化的影響関係にはないインドのヒジュラと比較することにより、「同類」の永続化に貢献することのない人々の捉え方、さらには、ジェンダー／親族／生殖という人類文化における根源的な側面を逆照射することはできないだろうかと考えている。研究方法において、それは「断絶における比較」[川田2004:4] である。それと同時に、ヒジュラとトラベスチは、現代のメディアの影響下にあるという点で「連続のなかの比較」[川田2004:4] という視点も必要である。インドのヒジュラ、ブラジルのトラベスチ、そして、そこに日本の男色文化や性同一性障害という現代医療の問題をも加えて比較検討することができれば、我々日本人にとってより身近な問題として、人類文化における性とジェンダーをめぐる普遍性と特殊性のあり方を考えることに資するのではないだろうか。

二週間という短い期間ではあったが、地元の日系新聞社の人脈のおかげで、実際にトラベスチが夜の街路上で売春相手を探す現場を見に行くことができ、また同性愛の世界が凝縮されたダンスクラブの状況を見ることもできた。帰国直前に、日本文化研究所で調査の報告を行った。研究所スタッフは、私の調査に懸念を抱いていたが、今度は逆に私を興味の対象として質問攻めにした。それは、彼らにとって全く別の世界に生きる存在であったトラベスチが、私を通じて、身近な存在として感じられるようになったからではないだろうか。研究所長からは、今日のブラジル社会では同性愛研究への関心が高まりつつあり、トラベスチ研究は時宜を得ているのではないかという、励ましの言葉をいただいた。

【参考文献】

- DENIZART, Hugo, 1997. *Engenharia Erótica – Travestis no Rio De Janeiro,* Rio De Janeiro：Jorge Zahar Editor.
- 川田順造 2001「性―自己と他者を分け、結ぶもの」川田（編）『近親性交とそのタブー』藤原書店、pp.9-30.
  2004『人類学的認識論のために』岩波書店
  2005「比較民俗学のために」『比較民俗研究』20号pp.1-4.
  2006「文化人類学とは何か」『文化人類学』71-3.pp.311-346.
- KULICK, Don, 1998. *Travesti – Sex Gender and Culture among Brazilian Transgendered Prostitutes,* Chicago & London: The University of Chicago Press
- 國弘暁子 2005「ヒジュラ:ジェンダーと宗教の境界域」お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報『ジェンダー研究』8:31-54
  2006『ヒンドゥー女神帰依者としてのヒジュラの多義性―インド、グジャラートにおけるヒジュラの存立構造に関する文化人類学的考察』お茶の水女子大学大学院学位申請論文（『ヒンドゥー女神の帰依者ヒジュラ：聖俗と性の境界をめぐる人類学的研究』という題で風響社より近刊予定）
- NANDA, Serena, 1999（1990）. *Neither Man nor Woman – the Hijras of India*: Wadsworth Publishing Co.
  （蔦森樹、カマル＝シン共訳、『ヒジュラ―男でもなく、女でもなく』青土社、1999）
- RITO, Lucia, 1998. *Muinto Prazer, Roberta Close,* São Paulo: Editora Rosa Dos Tempos.

コラム　Column

瀬戸内の小さな島で

香月　洋一郎（神奈川大学日本常民文化研究所　教授／事業推進担当者）　KATSUKI Yoichiro

今から二十年ほど前、瀬戸内西部の小さな島をよく歩いていた。その島は面積が一平方キロほど、集落は二つというほんとうに小さな島だったが、瀬戸内海有数の一本釣漁の根拠地として個性的な歴史をもっていた。

その当時、この島が二十年後どうなっているのか、コンピューターで簡単なシミュレーションをしてみたことがある。二十年後は負債とお年寄りしか残らない。コンピューターの画面にはそう要約するしかない数字があらわれていた。実はその当時も、その島が属する自治体は少なからぬ負債を抱え、そしてお年寄りの多い島だったのである。

そして最近、ほぼ二十年ぶりにその島を歩いた。やはり「負債とお年寄りの島」だった。けれども二十年ほど前のお年寄りはほとんど鬼籍に入られていた。かつてのお年寄りの御子息にあたる世代の方が定年後にUターンされて島にもどられ、かつて幼少時をすごした家に住んでおられたのである。その間、何が変わったのか。走り書き的にだが略記してみると、①新しいハコモノが増え、道の舗装がすすんだ。②波止がきれいになった。③山が荒れた。という点があげられる。この程度の変化は通りすがりの私にもすぐに見てとることができた。

①についての問題はいろいろとマスコミでとりあげられていることであるから、ここでは省く。②は波止に積み上げられていた様々な漁具がきれいになくなり、波止がすっきりとして歩きやすくなっていたことを示す。かつて瀬戸内の漁師は「七漁具（ななもとで）七漁師」と言われるほど多種多様な漁具を揃えていた。地形や海流が複雑であり、さらに好市場も多いことからこまやかな形でそれらの動きに対応せざるを得ず、専業の漁師であるほど新漁具、漁法の導入に敏感であり貪欲だった。そして一旦使われなくなった漁具でも、置き場がある限り山積みにされていた。いつまたそれらが利用できるようになるかもしれないのだから。そのため瀬戸内の波止は多様な漁具で雑然としていたものである。三十年間は使っていないタコツボの山や、五年前まで使っていた底引き網のさびた金具の脇を抜けて、波止を歩くことになる。それらがきれいに処分された波止になっていた。波止の雑然さが消え、なにか静かな空間となっていた。これはひと世代前の潜在的な漁への姿勢が一掃されたことをもの語っていよう。伝承そのものではなく、その基盤となる意志や意欲がきれいに消えた。けれども現在のお年寄りたちも、折を見ては地先に小船を出し、一本釣りを楽しんでおられる。そこだけを切り取ると、そう大きな変化はないとも言える。

③についても同様である。山が荒れ始めると、山が何の稼ぎになるというわけではなくとも鉈や鎌を持って山そうじに出かける。そんな姿勢を持った世代がいる限りは、山が稼ぎの場でなくなっても一挙に荒れることはない。集落に遠い山から少しずつ荒れていく。そんな姿勢が薄い世代に変わると、山の荒れ方は一挙に、そして明快にあらわれる。

人の意思の環境への届き方は、そこに違いとなってはっきりとあらわれてくる。たとえ都会人が言う「自然」の中で人が暮らしている環境においても。家とハコモノと道、そこに意思が強くおさまり、山と海への目配り、心配りがみるみる薄くなっているありさまを見ると、自然に囲まれたこの地においても、そこに人はある意味で「都市」の凝縮された断片を持ちこみ、それを生活のなかのなにかと置きかえることで問題を処してきたのだろうか、処していくのだろうか。そんな思いにも至る。

Field Note

変化しつつある文化遺産
―広東醒獅の現状について―

彭　偉文（COE研究員・RA）　PENG Weiwen

広東醒獅は代表的な中国南方獅子舞の一つで、清・乾隆年間に、仏山に起源したとされる。主に中国の広東省、広西チワン族自治区の東南部、香港、マカオに分布しており、海外の華人社会でも広く行われており、華やかな獅子頭や胴幕と、武術に基づいた激しい振り付けなどの特徴を持っている。広東醒獅は本来、主に「武館」という武術団体に伝承されてきたため、芸態から獅子頭の紋様まで、伝承母体とその仕組みに著しく影響されてきた。現在、村落や企業、業界組合などによる組織や、営利を目的としたさまざまな団体によって伝承されている。2006年5月、広東醒獅は国の非物質文化遺産に認定された。ただし、認定以後の保護、伝承などについて、国からの明確な指導や法的な規制はない。そして、国からの補助金が保護項目の伝承地まで下りるため、たいした区別はないが、広州醒獅、仏山醒獅、遂溪醒獅と三つの主な伝承地によって分けて申告し、別々に認定された。

昨年の11月1日から2週間、若手研究員として、中山大学中国非物質文化遺産研究センターを訪れた。派遣先の先生方の紹介で、仏山市博物館所属の黄飛鴻記念館武術龍獅団の団長の陳幼民氏、獅子頭生産会社の取締役の夏志成氏を訪問し、広州市の近郊にある沙坑村で現地調査を行った。

陳幼民氏は1948年に生まれ、醒獅の名人として知られている。中国の文化部、国家民族事務委員会及び中国舞蹈家協会が組織した全国民族民間舞踊調査で、彼とその師匠・趙栄が広東醒獅のフルセットを演じ、模範舞踊として『中国民族民間舞蹈集成・広東巻』に記載された。1999年に、北京の天安門広場で行った建国50周年記念大典で、彼はヘッドコーチとして、広東南獅献礼団を率いて芸を披露した。また、彼は武術にも優れており、広東の「武林百傑」の一人に選ばれている。

夏志成氏は陳幼民と共に醒獅の名人とされ、1999年の大典では、献礼団の幹部として北京に行っている。現在、彼は獅子頭の工場を経営しながら、仏山市武術協会の副会長を務めている。その工場の製品には獅子頭の他、胴幕や専用の靴をはじめ、楽器など、広東醒獅のあらゆる道具が含まれている。また、注文に応じ、北方獅子の頭や龍舞の道具も作っている。広東省内の注文の他、東南アジアや欧米からの引き合いも非常に多いという。

沙坑村は本来仏山の近くにあったのだが、1950年代、軍用空港の建設に伴って村全体が広州市の近郊に移転した際、広東醒獅の伝統は村と共に現在の地に移ってきた。1997年に正式に設立された「沙坑村龍獅団」は、多くの国際大会で優勝し、「民族民間芸術之郷」と「中国国家醒獅集訓基地」に指定されている。村民の多くは周の一族に属し、毎年旧正月の8日に、友好関係のある村に招待状を出し「生菜会」という醒獅大会を開催している。

先に述べたように、文化遺産に認定されたが、国からの指導や法的規制がないため、広東醒獅は従来発展し変容してきた道を、これからも辿っていくと考えられる。つまり、今回の調査で見られた広東醒獅の変化は、文化遺産に認定されてから起こった変化ではなく、また認定された後もその変化がとめられるとは思わないからである。

別稿で論じたが、新しい技を追求するのは、中国における多くの獅子舞にとって当然のことである。その理由はいくつかあるが、宗教性の希薄さ、及び獅子舞の芸を以って生計を立てている芸人の立場が主な原因であると思われる。広東醒獅も例外ではない。その他、広東醒獅は1970年代から競技になった。最初のルールはA5判8ページ程の小冊子で簡単なものであったが、現在は完全なルールができ、年に数回の国際大会を開催するようになった。そのため、広東醒獅のあらゆる面に変化が起こっている。

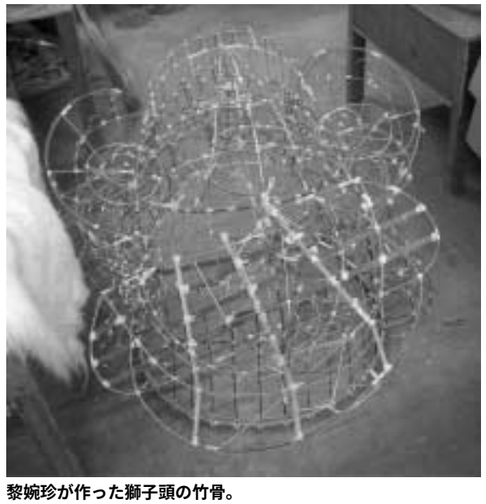
なかでも、振り付けと道具の変化が最も著しい。広東醒獅の振りにはいくつかの流派があるが、そのほとんどはフルセットを演じるのに40分以上かかる。競技化した醒獅の振りは非常に激しく、40分間舞い続けるのには体力的に無理があること、また時間を節約する目的もあって、国際大会では参加チームごとに10分から12分の時間制限がある。現在、多くの醒獅団体はこれに適したコースをアレンジして練習に力を入れている。また現在の若者は、昔と違って普段は肉体労働をほとんどしないため、体力が落ちていると陳幼民氏は指摘する。

広東醒獅は、基本的に動きの激しい中国獅子舞の中でも、特に技が難しく華やかなものである。そのため、重さ4～5キロの軽い獅子頭を使っている。広東醒獅の獅子頭は典型的な張子獅子頭である。竹で骨を組み、その上に何重もの紙を張り、目蓋などの動くところは絹で作り、乾かしてから紋様をつけて出来上がる。伝統の紋様は、『三国志』の劉備、関羽、張飛または「五虎将」をイメージしたものが多かったが、数年前から東南アジアの影響で、紋様が簡単になり、赤や紫、金などの色が多く使われるようになった。最近では、国際大会の特に激しい振り付けに適するために、小さくて軽い獅子頭の需要が高まっている。寸法を小さくするほか、竹骨を細くし、紙を三重から二重にするなど、さまざまな工夫がこらされた。仏山で代々獅子頭を作ってきた有名な黎一族の五代目・黎婉珍を自分の工場に迎えた夏志成は、伝統を守りたいと強調していたが、注文の多くは新しい型の獅子頭であるため、現実に逆らうことができないようである。

ほかに注目すべきことは、広東醒獅の伝承母体とその自己認識の変化である。前述のとおり、醒獅は本来、武館によって伝承されていたが、中華人民共和国成立後、武館は姿を消し、企業や村落などによって組織された醒獅団体が主な担い手になっている。これらの醒獅団体は、その上級機関や村からある程度資金援助を得ているが、基本的に年中行事や、催し物、店や企業の開業などの際に雇われて芸を行い、収入を得て運営している。そのため、客からの万一の要望に応じられるように、伝承してきた醒獅の他に、北方獅子の練習も少しは行わなければならない。

沙坑は、大都市の近郊にあるため、農業をやめて工場や住宅建設などを営み、生活が非常に豊かになった。仕事で都合が悪い、厳しい稽古に堪えられない、など様々な理由で、醒獅に多くの時間と精力を費やす人が少なくなった。醒獅の伝統を保ち、大会でいい成績を収めるために、比較的経済発展の遅れている湛江などの地域から子供を雇い、武術と醒獅を教え、村の代表として大会に参加させるようになった。湛江は広東省の西南部にあり、醒獅と武術の伝統を有しているところである。そこの醒獅団体に頼み、10歳前後で素質のある子供を探し、実家を離れて沙坑に住み込ませ、給料を払い、午前中は醒獅と武術の稽古をさせ、午後は学校に通わせる。彼らは元々の村民ではないため、いつか沙坑から去るはずだと、沙坑龍獅団の責任者も覚悟しているようである。他所から雇ってきた人が行う醒獅は、沙坑の醒獅と言えるかどうかについて聞くと、答えは肯定であった。沙坑が雇った人が、沙坑から給料をもらい、沙坑村の名義で大会に出ているから、たとえ村民でなくても、その醒獅は沙坑のものである、と。

この数年間、醒獅の調査をしてきたとはいえ、このような現象を見たのは初めてであった。これについて、更なる観察と調査を行いたいと思う。



黎婉珍が作った獅子頭の竹骨。

経済発展の遅れた地域から雇われてきた子供たち。

コラム　Column

野外民族博物館リトルワールドにおける「民族」概念についての初歩的レポート

フレデリック・ルシーニュ（COE研究員・RA）　Frédéric LESIGNE

1983年3月に開館したリトルワールドは、愛知県犬山市と岐阜県可児市にまたがる愛岐丘陵の中に位置する私立野外民族博物館である。近在の博物館明治村、日本モンキーパークと併せて、文化的な観光事業として名古屋鉄道株式会社（以下名鉄と略記）によって設立された。2003年10月から名鉄の子会社・名鉄インプレスの運営となり、現在、完全にテーマパークに変化してきている。[1] 名鉄グループの累積赤字削減のために、閉園が検討され、一時、閉鎖の可能性も検討されたが、文化人類学関係者の協力も得ながら新たな方向性を探っている。これまで集客のために行ってきたサーカス等のイベントに代わって、世界の料理や民族衣装の試着などの、愛・地球博で好評だった分野にも力を入れ始めている。

博物館の施設は本館展示場と野外展示場の2部構成からなり、敷地面積は123万平方メートルに及ぶ。本館展示場は世界70カ国から集めた約6000点の民族資料を展示し、進化、技術、言語、社会と価値という5室に分かれ、テーマごとに民族の文化の多様性や共通性を紹介している。一方、野外展示場は1周2.5キロの周遊路に沿って、ヨーロッパ、アフリカ、アジアなど22カ国33の家屋を移築・復元している。また、各国の家屋では、民族衣装の試着体験や、その国ならではの料理やショッピングを楽しめるような施設が充実している。

本館に収められている世界各地からの6000点の民族資料と野外の33展示家屋は非常に貴重なものである。例えばネパール仏教寺院の再現は2年もかかったようであるが、リトルワールドの研究者は現地のシェルパ族の村で正確な実測を行ったうえで、地元の絵師を日本に招き、手描きによって仏画を再現させた。

1974年の創設以降、財団法人リトルワールドは海外の現地調査を活発に援助した。[2] 1983年に世界で初めて野外民族博物館として開館した時、「人間博物館リトルワールド」と呼ばれ、レベルの高い研究拠点でもあった。モンキーセンター開発当時から澁澤敬三と親しかった土川元夫（名鉄元会長、1974年死去）がこの計画の陣頭指揮をとった。「明治村」という建築博物館がすでにあったので、それを世界規模にひろげた形で、万国博に建つ世界各国の建物を、将来一か所に移築したいという構想は1967年頃からあった。しかし、1970年に開催された万国博会場には、予想に反して近代的なビルディングのみが建っていたので、名鉄の経済力を背景に、今度は民族的な色彩のある民族学博物館という施設の計画の検討をはじめた。その際、民族学者の泉靖一（東京大学教授、アンデス研究、1970年死去）にリトルワールド設立計画への協力をあおいでいる。当時すでに、大阪の国立民族学博物館設立の計画も平行して進められており、泉はその推進役であったが、開館の目途はまだ立っていなかった。「そこで、国立と名鉄と、二本レールで走ろうということになった」と、モンキーセンターの評議員で、後に国立民族学博物館初代館長に就任した梅棹忠夫は回想している。[3]

COEプログラムのRAとして最終成果論文集に掲載する予定の私の論文は、リトルワールドの事例と関連して、「民族」概念をテーマにした研究である。

リトルワールド博物館の開館は1983年3月であるが、計画の検討開始は1967年に遡り、その設立工事は1970年代に行われた。1960～70年代の日本の人文科学の分野において「民族」概念は、根本的なタームとしてさまざまな理論を支えるために頻繁に使われていた。とりわけ戦後20年間、多数の日本人論が出版されたが、それらの自画像としての日本人論には、「日本人」について語るときに同義語として「日本民族」という表現が登場して、日本民族を世界の他の民族と対比するスタンスが主張されている。日本人論に関する先行研究によると、このような刊行物が広く読まれた理由は、小熊英二が論証したように、終戦にともなって日本人の文明論の関心が日本列島に戻った、という社会のニーズの変化[4]とともに、明治時代から進められてきた日本の文化人類学のさまざまな研究の成果が戦後にまとめられて、それが日本人論の形成にも取り入れられるようになったという現象も挙げられよう。

リトルワールドの場合は、もちろん社会のニーズに敏感な名鉄の動きによるところが大きいと思われるが、それと平行して、この博物館設立に協力した研究者たちは戦前から活動してきた一流の文化人類学・考古学の専門家であり、彼らは、戦前から行われてきた民族学・文化人類学の研究を1950年以降、リトルワールドや大阪の国立民族学博物館へ持ち込むようになった。結果的に、「民族」概念も自然にリトルワールド計画に導入され、暗黙の了解の上でリトルワールド計画構想の時点から「民族」概念が重要な役割をはたした。

リトルワールドと関連して、フランス語と比較して日本語の「民族」概念の特徴を一つ述べておきたい。「民族」概念はフランス語のエトニ（ethnie）、または英語のエスニック・グループ（ethnic group）と比べると、対象の範疇が広い。特に注目すべきものは、例えばフランス語では「エトニ」という概念がそもそも民族学の学術的なタームであるから、そのタームを西洋人に対して使用しない傾向がある。西洋人のためには、peuple（ポープル）やnation（ナシオン）をより好んで使用する（英語も同様）。それが差別にあたるかどうかはここで議論を省くが、ともかく、「エトニ」は植民地時代から明らかに人類の一部分しか指さない意味範疇をもっている。[5]

それに比べて、日本語の「民族」概念の方は、紛れもなく、日本人はもちろんのこと、人類のすべての集団を指す。戦前には「部族」という表現もあったが、戦後になってあまり使用されなくなり、人類の多様性を論じる場合は、主に「民族」概念を用いるようになった。その事情はリトルワールドと深い関係があると思われる。理論上、人類がいくつかの「民族」という集団に分類されているという認識が存在して初めて、リトルワールドという空間の中で世界中の「民族」を「民族学」の視座で平等に展示する構想が可能になる。さらに言うと、梅棹忠夫の希望を裏切って、リトルワールドのような、全世界の民族を対象にした野外民族学博物館は世界的に日本にしか設立されていないという事実も日本語の「民族」概念の特殊性を示唆的に語っていると思われる。[6]

リトルワールドの例を取り上げた理由は、あくまでもこの研究を「民族」概念の歴史的な検討の一環として考えているためで、この施設を批判、あるいは賛美するためではない。西欧ではヒストログラフィー（学問の歴史、研究史）の観点で、学術的な見解を分析し、暗黙の了解で使われがちな概念を問うことが基本的な作業であると考えられている。日本でも同じような作業が大変重視されているので、ここで欧米と日本とを対比させるつもりはない。ただ、「民族」概念に対して特別な思いを抱く外国人として常に思うのは、この概念を相対化して、明治時代から現在まで日本の学問の背景においてその位置づけを明らかにすることができたならば、どれほど日本の人文科学に資するだろうか、ということである。

したがって、この研究の目的はリトルワールドにおける「民族」概念を相対化して、その概念の役割を明らかにしようとするものである。それにあたって、リトルワールドの刊行物の検討と現地の見学を計画している。また、リトルワールドは第二次世界大戦の時代を生きた一流の研究者や実業家が構想し、設立した博物館であるため、「民族」概念と関係している限り、彼らの戦前・戦中の活動や書物にも注意を払うつもりである。

（なお、文中の敬称は省略させていただいた。）

リトルワールド刊行の冊子表紙より
野外展示場に1986年4月にオープンした「フランス・アルザス地方の家」で、翌年の7月から「民族衣装」を着て伝統文化を紹介していたアルザス地方出身の女性たち。

（1）名鉄のホームページより。

（2）『Little World News』1号、1975年7月。

（3）大貫良夫・梅棹忠夫、「野外博物館のビジョン」『月刊みんぱく』、1978年10月号。

（4）小熊英二、『＜日本人＞の境界: 沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮植民地支配から復帰運動まで』、新曜社、1998年。

（5）拙稿、「フランス民俗学辞典の『民族』項目の翻訳」、『比較民俗研究』17号、2000年3月、ｐ175-178。

（6）日本やアジアにおいては、海外の文化を紹介するテーマパークや外国村が多い。またその国の民俗を扱う「民族博物館」が多く設立されている（Joy Hendry, *The Orient Strikes Back－A Global View of Cultural Display－*, Berg, 2000に参照）。ただし、リトルワールドのように同じ施設の中で、網羅的に自分の文化と他者の文化を民族学の視点で扱う野外博物館は日本以外に類が無いようである。

コラム Column

北斎を追って

ディオゴ・カウパテス（サンパウロ大学日本文学専攻院生） Diogo KAUPATEZ

わたしは、富山県によるサンパウロ大学の学生のための奨学金を受けた時から葛飾北斎の研究を始めた。もちろん、以前からサンパウロにある和食レストランで見た「神奈川沖浪裏」（「富嶽三十六景」）や美人画を知っていたのだが、それはこの世界に踏み込むきっかけにすぎなかった。しかし北斎について学ぶことは江戸時代とその伝統を学ぶことであり、日本人が持っていた（そして現在も持っている）集団意識や、北斎が獲得し、また尊敬されていた独特な個性に向きあうことである。

浮世絵師の先行研究を調べると興味深いことに、広重についての文献は多く、国芳や歌麿についての翻訳もかなりの数にのぼるのだが、月岡芳年や東洲斎写楽になるとその数は減る。その他の多数の文献は画集の分野に集中している。例えば勝川流、歌舞伎関連、春画、17世紀の浮世絵師などである。北斎が一流の芸術家であったことには疑う余地はないが、しかしなぜ北斎についての文献は他の浮世絵師と比べものにならないほど多いのか。

北斎の人格は人の魂の奥まで深く染み込むのだと思う。北斎自身が絵を描くという一番好きなことに没頭し、それ以外の家の整理、金銭、外見、華やかさ、女、お酒、高い服などについては関心がなかったようである。一方、支配階級か庶民かを選択するようなとき、北斎は迷わず自らの出自に従い、庶民の日常生活や衣装を、ひとにぎりのすぐれた社会学者でしか把握できないほどの洞察力で描写している。

滞在中、東京国立博物館の「北斎展」、江戸東京博物館、太田記念美術館、浅草寺などを見学することができた。また、永田生慈が創立した研究会の方々に会うことができ、北斎研究の専門家による雑誌も手に入れることができた。神奈川大学COE主催の第1回国際シンポジウムでの企画展示「浮世絵における常識と非常識―復刻版でみる『名所江戸百景』」では伝統的な木版画の摺りの実演を見ることができた。

何かがわかったとはいえないのだが、歌舞伎を観た感動は大きかった。北斎の墓参りをし、北斎の名が付いた通り、生地での建造物、北斎の作品を称えた両国橋の記念碑、「神奈川沖浪裏」が描かれたペン、数多くの本などを見て、日本人が未だにその浮世絵師に敬意を払っていることを理解することができた。

私の研究成果は近いうちに神奈川大学に送る予定である。それは1814年の「漫画」シリーズの初版に至る北斎の人生について研究しており、決して新しい研究ではない。今現在は、全ての作品から「漫画」画集の15編に焦点を合わせた。北斎の浮世絵は一分野だけに偏らないため、様々なテーマについて考える機会ができた。この中には役者似顔絵、美人画、絵暦、刷り物、狂歌、名所絵、浮き絵、「新板浮絵忠臣蔵」、「北斎の東海道五十三次」、春画、黄表紙、洒落本、読本、絵画、そして多数の手引きなども含まれている。もちろん「富嶽三十六景」、「富嶽百景」、「諸国滝廻り」、「諸国名橋奇覧」、「北斎花鳥画集」など1814年以降に完成した名作も無視できない。

その当時の社会についての研究も必要であった。鎖国時代について、あるいは江戸幕府による浮世絵と浮世絵師の検閲、参勤交代、木版画摺り、江戸時代の芸術家の流派の組織、吉原などの遊郭、遊女の生活など様々なテーマにも触れた。ブラジルには子供用に書かれた薄い本以外には、ポルトガル語での北斎についての文献がない状況であり、私はこの研究では革新的なものを創るつもりはない。なぜなら、あるテーマを考察する論考の場合、その読者が基本的知識を持つことを前提にしている。そうした状況でない以上、まず紹介していき、そこに時折自分の意見も加えるようにした。

この研究が北斎研究全体に貢献できることを望むとともに、今回の充実した滞在の機会を与えてくれた神奈川大学に感謝する。

（ディオゴ・カウパテス氏は2005年11月13日～11月29日まで訪問研究員として来日された。肩書きは日本滞在当時のものである。）

神奈川大学COE主催の展示「浮世絵における常識と非常識」にて江戸時代の浮世絵の版画作りを再現

＊本稿は英語で提出されたものをサイモン・ジョン（2005年度COE調査研究協力者）が翻訳し、また紙面の都合から編集部で内容を一部割愛したものである。

コラム Column

神奈川大学付近での考察に見られた日本の村落共同体

劉 暁春（中山大学中国非物質文化遺産研究センター助教授） LIU Xiaochun

2006年10月、神奈川大学21世紀COEプログラムに招かれ、日本で2週間の調査研究を行った。歓迎会の際、拠点リーダーの福田教授に村落調査研究についてご教示を仰いだところ、村落共同体は日本には存在するが中国には存在しない、という説に言及された。中国に存在しない？私は釈然としなかった。中国南方の客家地域で長期に渡ってフィールドワークをしてきた経験から見れば、客家地域では、村落共同体は基本的に血縁に基づき、一姓または多姓が集中して居住し村落を形成している。このような家族に基づいた血縁共同体は、村落の範囲を越えてもっと広い範囲に及び、さらに国境を超えている。そこで福田先生は、農村の痕跡を見ながら、私が日本の村落共同体を実感できるようにと、時間を割いて大学付近を案内して下さることになった。

10月12日、私は先生と共に大学付近を歩き回り、約2時間の考察を行った。短時間ではあったが、先生のフィールドワークの視点から大いに得るところがあった。

一つめは、調査地の地理的特徴を重視することである。出発前、先生は私に1950年代の大学周辺の写真を見せて下さった。写真からは、当時大学の主要な建物は六角橋の高台に位置し、数軒の民家を除けば、付近はほとんど農地であったことがわかる。少し離れたところに建物が散在しており、農家だと思われる。当時からたいして変化してない地形に沿って、現在では周囲には多くの住宅が密集して建てられている。

我々は東門を出て北へ進み、住宅地に入った。大学のすぐそばに、少し盛り上がった土の山があり、そこに稲荷の祠が立っていることに目を惹かれた。このような大学のすくそばにあって、現代風の一戸建ての住宅に囲まれている祠は、中国人の私にとって非常に珍しい光景であった。先生の話によれば、この祠は六角橋の代々の住民に祭られており、周辺の住宅に住んでいる人々にはあまり関係ないと思われるという。これらの建物を見れば、そこに住んでいる人は他所から引っ越してきたと判断できるからである。

坂を下ってさらに進むと、周りと明らかに違う構造を持つ一軒の家が目の前に現れた。広い庭には多くの樹木が植えてある。先生は、この屋敷の持ち主は古くからのここの住民であろうこと、他所から移ってきて、土地を買って建てた家は、広い庭を持つことが少ないことを付け加えられた。屋敷の向こうに、「神奈川消防団第七分団」と書いてある建物があった。これは六角橋の地域的な消防団で、地域共同体の具体的な表現の一つであろう。

二つめは、細かいところから歴史の情報を掴むことである。曲がりくねった狭い道を歩いていた時、これは川を埋め立ててできたもので、川の流れにそのまま沿っているから、くねくねとしているのだと説明をうけた。一見普通の道で、先生の説明がなければ、私にはこれは川であったと思いつくはずがなかった。道端にあるごく普通の石塊に、先生が足を止められた。石塊は長方形で、その一つの面に「地神塔」とあり、反対側には「○○構中」とあった。上の二つの字は判然としないが、六角橋にある地域共同体の一つであろうと思われる。また、大学の南側には庚申を祭る祠（写真参照）があり、そこにも「南側講中」と刻んだ石碑があった。これらの石碑からも、先生のおっしゃる日本における農村社会の村落共同体の概念が窺えよう。

この考察は国立歴史民俗博物館で見た展示を想い出させた。第4展示室の「村里の民」の展示は、秋田県湯沢市岩崎の藁人形、村の常夜灯、西日本の集落の模型などで、日本の農村社会における地縁共同体の重要性を表現している。藁人形は毎年作り替えて村の入り口に置き、村の安全を祈願する。それぞれの村に、光や音などを使った独自の信号で、火事や盗難などの情報を村社会の中に伝えるシステムがあり、村の安全を保障する。こういった風習から、日本の農村社会における地縁共同体の結束の強さが窺える。このような村落共同体の概念は、確かに、中国―少なくとも南部中国―の農村社会の地域共同体とは大きく異なっている。というのは、中国の農村社会の地域共同体の多くは血縁の上に成り立ち、血縁を基礎として一姓村または多姓村を形成し、血縁を越えた地域共同体は比較的少ないからである。

（劉暁春氏は2006年10月2日～10月15日まで訪問研究員として来日された。）

＊本稿は中国語で提出されたものを彭偉文（RA）が翻訳し、また紙面の都合から編集部で内容を一部割愛したものである。

受贈資料一覧（書籍・雑誌）

（2006年12月～2007年2月）

タイトル	発行所
成果報告書（平成14年度－平成18年度）	大阪大学大学院生命機能研究科21世紀COEプログラム 「生体システムのダイナミクス」
研究実績英語論文集『Research Monograph: Studies of Human Development from Birth to Death』	お茶の水女子大学21世紀COEプログラム 「誕生から死までの人間発達科学」
「先端社会研究」No.5	関西学院大学大学院社会学研究科21世紀COEプログラム 「人類の幸福に資する社会調査」の研究
ニューズレター　No.5、6	九州産業大学21世紀COEプログラム 柿右衛門様式陶芸研究センタープログラム
ニューズレター　No.9	京都大学21世紀COEプログラム「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点―漢字文化の全き継承と発展のために―」
ニューズレター　No.14	京都大学大学院法学研究科21世紀COEプログラム 「21世紀型法秩序形成プログラム」
ニューズレター　No.8	近畿大学21世紀COEプログラム 「クロマグロ等の魚類養殖産業支援型研究拠点」
ニューズレター　No.9	慶應義塾大学21世紀COEプログラム「多文化多世代交差世界の政治社会秩序形成―多文化世界における市民意識の動態―」
CIRMニューズレター　No.15、16 平成17年度成果報告書	慶應義塾大学21世紀COEプログラム 「心の解明に向けての統合的方法論構築」
「神女大史学」No.23	神戸女子大学史学会
「神社と民俗宗教・修験道」研究報告書　No.2 「神道宗教」No.199、200（抜刷） 「現代・神社の信仰分布―その歴史的経緯を考えるために―」	國學院大學21世紀COEプログラム 「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」
「史資料ハブ　地域文化研究」No.8 「9.11後5年　アフガニスタンは、今」報告集 研究叢書『明治・大正・昭和期　南アジア研究雑誌記事索引』 研究叢書「Katalogus Manuskrip dan Skriptorium Minangkabau」 研究叢書「Postgraduate Symposium」 研究叢書「Enriching the Past」 研究叢書「Percepciones y representaciones del Otro」 研究叢書「徽州歙県程氏文書・解説」	東京外国語大学21世紀COEプログラム 「史資料ハブ地域文化研究拠点」
ニューズレター　No.13～16	東京工業大学21世紀COEプログラムSIMOT 「インスティテューショナル技術経営学」
ニューズレター『Wind Effects News』No.13	東京工芸大学21世紀COEプログラム風工学研究センター 「都市・建築物へのウィンド・イフェクト」
DALSニューズレター　No.16 成果報告書「死生学研究」No.8（2006年秋号）	東京大学大学院人文社会系研究科21世紀COE研究拠点形成プログラム 「生命の文化・価値をめぐる『死生学』の構築」
パンフレット	東京大学大学院理学系研究科化学専攻21世紀COEプログラム 「動的分子論に立脚したフロンティア基礎化学」
2005年度研究成果報告書 ニューズレター『CISMOR VOICE』No.5	同志社大学21世紀COEプログラム 「一神教学際研究センター」
平成16年度中間成果報告書 平成17年度成果報告書	豊橋技術科学大学21世紀COEプログラム 「未来社会の生態恒常性工学」
年報2005 『国際日本学研究』第2号（訂正されたもの）	法政大学21世紀COEプログラム 「日本発信の国際日本学の構築」
「科学技術動向」No.68～70	文部科学省科学技術政策研究所　科学技術動向研究センター
ニューズレター　No.5	早稲田大学演劇博物館21世紀COEプログラム 「演劇の総合的研究と演劇学の確立」

主な研究活動

（2007年1月～3月実施予定分含む）

研究推進会議

■第12回　2月7日・2007年度研究計画・予算、COE終了後の事業継承、発展計画について　他

■第13回　3月7日・2007年度COE研究員（PD）の選考、共同研究員人事について　他

全　体　会　議

■第6回　2月16日・2003年度採択拠点に対するフォローアップ、2007年度組織について　他

研　究　会

全　体

■第6回　2月16日・佐野　賢治「インターネットエコミュージアムの可能性」

班（課題）　＊課題名の表記は略称です

■1月16日・1班「『東アジア生活絵引』編纂」　研究会
■1月20日・1班「『近世・近代生活絵引』編纂」　研究会
■1月29日・5班「実験展示」　公開研究会
　北村　彰（日展博学支援室室長）「展示の現在」
■2月2日・1班「『東アジア生活絵引』編纂」　研究会
■2月4日・1班「『近世・近代生活絵引』編纂」　研究会
■2月24日・1班「『近世・近代生活絵引』編纂」研究会
■2月26日・1班「『東アジア生活絵引』編纂」研究会
■3月12日・5班「実験展示」　公開研究会　「学芸員の専門性をめぐって」
　第1回「今後の学芸員養成と博物館学の方向性」
　瀧端　真理子（追手門学院大学助教授）／井上　敏（桃山学院大学助教授）

■3月16日・6班「理論総括研究」　研究会
■3月26日・5班「実験展示」　公開研究会　「学芸員の専門性をめぐって」
　第2回「今後の博物館活動と博物館学の方向性」
　犬塚　康博（愛知文教大学国際文化学部非常勤講師）／金子　淳（パルテノン多摩学芸員）
　竹内　有里（長崎歴史文化博物館研究員）

現　地　調　査

中村　ひろ子	神奈川県小田原市（1月24日）
神奈川県立生命の星・地球博物館において実験展示にかかわる「バリアフリー研修会」（日本博物館協会主催）への参加	

山口　建治	京都府京都市・兵庫県神戸市（2月1日～4日）
神戸女子大学古典芸能研究センター・吉田神社・長田神社などにおける鬼追行司と祓いの技法の現地調査	

中村　ひろ子	東京都墨田区（2月27日）
江戸東京博物館において実験展示にかかわるシンポジウム「誰にもやさしい博物館づくり」への参加	

山口　建治	福井県小浜市（3月2日〜3日）
神宮寺においてお水送り行司の調査	

大里　浩秋、冨井　正憲	中国　天津市・青島市（3月10日〜18日）
天津南開大学および天津旧日本租界、青島旧日本人居住区における旧日本租界に関する現地調査	

金　貞我	福岡県太宰府市（3月13日〜14日）
九州国立博物館において韓国編生活絵引関連資料調査	

フレデリック・ルシーニュ（RA）	福島県南会津郡（3月22日〜25日）
データベース構築のための民具カードスキャナ取込作業、および現地調査	

三鬼　清一郎	山形県米沢市・秋田県秋田市他（3月23日〜28日）
上杉博物館・秋田県立図書館他において文献資料（地図・絵図を含む）の調査研究	

訃報

原信田實さんの笑顔にもう会えない

北原　糸子

原信田實さんが1月30日癌のため闘病1年も満たずに亡くなってしまった。神奈川大学21世紀COEプログラムが始まると、最初の第3班「環境と景観の資料化と体系化」の共同研究員として、第1回全体研究会の研究発表以来、第1回国際シンポジウム、プレシンポジウムなどにもお付き合いいただいた。短い間ではあったが、わたしとは浅からざる付き合いとなった。COEで一緒に追究した「名所江戸百景」を安政江戸地震との関係から読み解くという課題を発展させて、この春には新書にまとめて出版する計画であった。この仕事の校正を終えずに逝ってしまわれた。50代の終りを迎えたばかりであったから、まだ「若すぎる」死である。残念というか、本人が一番悔しいだろうと思う。

原信田さんにはじめてお会いしたのは、2003年NHKハイビジョンで歌川広重の「東海道五十三次」と「名所江戸百景」を取り上げた2時間番組の作成現場からであった。鯰絵ならいざ知らず、正統派美術史の領域で論じられてきた広重の錦絵を江戸地震との関係で論じた新しい見方をする人が現れたというので、番組を作るという話であった。番組での話しは、「へぇー、こんなことを考えている人がいるのだ」とは思ったが、論点には思い付きの域を出ないところがあって論証不十分だという感触を持ったことは事実だ。

しかし、このCOEの課題が「人類文化における非文字資料の体系化」だと気づき、錦絵はまさしく「非文字」だから、災害による環境、景観の変化という問題に絡めても、十分展開できる要素をもっていると考え、2003年の初年度を原信田さんとの共同研究で出発することにした。現在の東京に「名所江戸百景」の痕跡を探すべく、タクシーで可能な限り現地調査するなどのこともした。車の減る日曜日を狙って夏の暑い一日、東京の下町を巡った。彼は車を降りるが早いか、待ちきれないように走っていくのである。その姿は嬉々として、まるで小学生か中学生のようで、いつまでも忘れられない。

また、COEで購入していただいた東京伝統工芸木版画協同組合が作成した復刻版『名所江戸百景』で常民参考室を会場に、金子隆一氏（共同研究員・東京都写真美術館専門調査員）に展覧会を構成していただいた。原信田さんのミュージアム・トークの効果もあって、多数の一般参加者の好評を得た。時に「オタク」の顔も覗かせ、「それは言い過ぎだよ」とストップをかけることも稀ではなかったが、なにものにも捉われずに、自分の考えを話す原信田さんは実に楽しそうだった。

彼の仕事の一部は、地震工学の中村操さんの協力を得て、『「名所江戸百景」と江戸地震』データベースとしてCOEホームページにアップされた（裏表紙参照）。また、4月にはカラーをふんだんに使った原信田實さんの遺著『謎解き「名所江戸百景」』（集英社新書）が出版される予定である。ここで、わたしたちは再び原信田ワールドに触れることができるはずだが、あの笑顔にはもう会うことはできないと思うといいようのない寂しさがこみ上げる。

調査研究協力者

本学プログラムの調査研究活動を支援していただく今年度のCOE調査研究協力者に追加委嘱された方です。

2007年3月現在

氏　名	所属部局・職名
尚　峰　SHANG Feng	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士前期課程在学

貴重資料の紹介

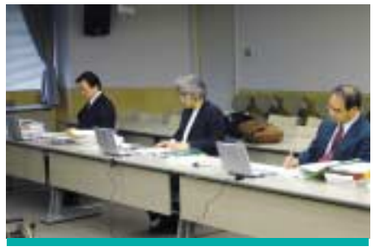
※2006年度に購入した資料

❶ 渡辺一郎監修・財団法人日本地図センター編著「伊能大図総覧」上・下・別冊（河出書房新社発行、大型本）
❷ 秋里籬島「摂津名所図会」全12冊（小川太左衛門発行、1796年、古書・和装本・ちりめん本）
❸ 陳枚「清　院本清明上河図」（1736年、巻物・原寸絹本）
❹ 秋里湘夕「都名所図会」全6冊（吉野屋爲八発行、1780年、古書・和装本・ちりめん本）
❺ 平瀬徹齋編「日本山海名物図」全5冊（鹽屋卯兵衛発行、1797年、古書・和装本・ちりめん本）
❻ 宮本馨太郎映像作品　全17冊（昭和初期撮影：宮本馨太郎ヴィジュアル・フォークロア、ビデオテープ）
❼ 貝原益軒「日本歳時記」全7冊（日新堂発行、1688年、古書・和装本・ちりめん本）

2006年度 神奈川大学21世紀COEプログラム外部評価の実施

■実施日：2007年2月13日
■会　場：神奈川大学横浜キャンパス 1号館308会議室

本学COEプログラム外部評価委員である常磐大学コミュニティ振興学部教授の水嶋英治氏、東京大学資料編纂所所長の保立道久氏、慶應義塾大学文学部教授の鈴木正崇氏による外部評価が実施されました。



COE支援事務担当

●下記の事務員が新しく加わりました。

[redacted]

藤本　真由海
FUJIMOTO Mayumi

主に編集業務を担当します。よろしくお願いいたします。

編集後記

30ページに北原先生が追悼文を書いてくださっていますが、原信田實さんが1月30日に亡くなられました。ご冥福をお祈りいたします。
21ページのコラムの拙稿は、スペースが半端にあいてしまったための文字通り穴うめです。この冊子は28〜32ページが一冊の分量なのですが、なかなかぴったり全ページ埋まって着地ということがありません。いつもいろいろと微調整をしているのですが、今回は窮余の一策。今後できる限りこうしたことは避けるべく努力したいと思います。（香月）

この季節になると思い出す、昔、教科書で読んだ染色家の話。彼女の染めた着物の美しい桜色は、花びらではなく、開花直前の桜の樹皮を煮出すことでしか取り出せない。桜はそれまでに全身で蓄えたピンク色を、花の色としてみせてくれているのだ。まもなく最終年度が始まろうとしている。（藤本）